

# 大本教の皇道宣揚運動と人類愛善会朝鮮本部の設立

——出口王仁三郎と内田良平との提携を中心に——

佐々 充 昭

はじめに

大正デモクラシーの挫折を経て昭和期に入ると、日本の国内外で様々な問題が噴出した。国内では世界恐慌の煽りを受けて一九三〇年頃から昭和恐慌が起こり、深刻な不況に陥った。また大正デモクラシーによる政党勢力の台頭は、藩閥・元老による統治体制を弱化させる結果をもたらした。統帥権という強力な武器を与えられていた軍部が、相対的な優越者として台頭してきた。このような状況の中で一九三一年九月に満洲事変が勃発し、翌年に満洲国が建国された。そして満洲国の承認をめぐる対立から、日本は一九三三年三月に国際連盟から脱退し、軍国ファシズムの道へと突き進んでいった。

このような危機的状況の中で、「皇道」という語が盛んに唱道されるようになった。この語は幕末維新期に尊皇主義者の間で好んで使われていたものであったが、満洲事変を前後する時期から再び注目を集め、天皇制イデオロギーをより絶対化し、日本の膨張主義的対外進出を正当化する理念として用いられた。こうして日本社会の中に広まった皇道という語を、自らの教義体系の中で積極的に再解釈し、社会不安の中でさ迷う民衆のアノミー心理をつかみながら急速に勢力を拡大していった宗教教団が存在した。出口王仁三郎（以下、王仁三郎とする）によって率いられた大本教である<sup>①</sup>。

大本教は一九二一（大正一〇）年と一九三五（昭和一〇）年の二度にわたって警察当局から厳しい弾圧を受けた。そのために、天皇制に真っ向から対抗した反権力的な宗教と見なされやすい。しかし、大本教の教義は、基本的に神道思想や国体論との類縁性を有し、天皇制イデオロギーを民衆宗教の立場から下支えする役割を果たした。大本教が二度にわたる過酷な宗教弾圧を受けたのは、天皇制に対して日本政府の統制を超えるような過剰な同調をみせたからである<sup>②</sup>。一九一八年に開祖の出口なおが死去し、娘婿の王仁三郎が教団の指導権を一手に握ると、その傾向はますます強くなっていった。王仁三郎は天皇制に柔軟に対応しつつ、国体の教義と類縁性を有する擬似天皇制的・擬似記紀神話的教義を構成しながら、日本の帝国主義的膨脹による海外進出に同伴して、積極的な海外布教を展開していった。

王仁三郎が採用した海外布教方式として特に注目したいのは、外国の諸宗教と提携関係を結び、その教団の海外拠点を利用しながら宣教活動を行っていった点である。大本教は数多くの宗教教団と提携関係を結んだが、その中でも特に中国の道院・世界紅卍字会との提携は最も深くかつ長く続いた。道院は扶乩<sup>フイヂ</sup>とよばれる中国の伝統的な神懸かり自動書記術によって神示を得て、それにもとづいて道徳修練を行う団体であり、一九二二年に民国政府から宗教教団としての認可を得た。さらに、その翌年（一九三三年）に社会慈善活動を行う道院の外郭団体として世界紅卍

字会（以下、紅卍字会とする）が組織された。この二つの団体は両者一体となつて活動し、中国の著名な知識人・政治家・軍人・財界人らが続々と入会して急速に勢力を拡大していった。

大本教は王仁三郎の指示のもとで一九二三年に道院・紅卍字会と提携関係を結び、その翌年に大本教信徒らによって日本で最初の道院である神戸道院が設立された<sup>③</sup>。そして、一九二五年二月に神戸道院のメンバーが中心となつて、各宗教間の融和親睦を図るために万教信教愛善会を発足させた。これが前身となり、普遍的人類愛を実現するための外郭団体として一九二五年に人類愛善会が設立された<sup>④</sup>。この創設の経緯が物語っているように、人類愛善会は、宗教教団と社会慈善団体の役割分担を行った道院と紅卍字会の二元的な協業システムに啓発されて組織されたものであった。

大本教が展開した人類愛善運動において、とりわけ注目されるのは、満洲事変に際して「大本教―人類愛善会」と「道院―世界紅卍字会」とが一体となつて戦災救援活動を大々的に展開した点である。この運動は、結果として、関東軍を中心とする満洲国独立仕事を背後から支援する役割を果たした<sup>⑤</sup>。

このような大本教の海外宣教活動の中で、中心的な教義として強調されたのが、まさに皇道の理念であった<sup>⑥</sup>。そして、王仁三郎の主導のもとに展開された大本教の皇道宣揚運動には、強力な協力者があらわれた。戦前に黒龍会を主管し、日本を代表する右翼として活動した内田良平である。内田は一九〇五年の第二次日韓協約によって朝鮮が日本の保護国となつた後、一進会という親日団体の顧問をつとめながら日韓合邦運動を推進した経験があり、朝鮮と深い関わりをもつ人物であった。

また内田は、一九二〇年代半ば頃から王仁三郎と交流を行い始め、大本教の皇道宣揚運動を積極的に支援した。内田は特に大本教と道院・紅

卍字会との提携に関心をもち、自ら日本紅卍字会の責任会長に就任して王仁三郎を支援した。一方、王仁三郎は、道院・紅卍字会との提携によって満洲国内に確固たる活動基盤を獲得した後、朝鮮へ本格的な進出を試みた。朝鮮には一九二〇年代から大本教の支部が設けられ、また一九二四年頃から朝鮮の新宗教教団である普天教との間に提携関係が持たれていたが、本格的な進出が試みられたのは満洲国の独立以降においてである。

大本教は一九三四年に人類愛善会朝鮮本部を設立して、朝鮮における宣教活動を本格的に展開していった。その際、内田がそれまで朝鮮で築いてきた人脈と活動基盤が大本教に継承されていった。こうして人類愛善会朝鮮本部には、内田と関係の深かった元一進会の会員らが多数入会していった。そのために朝鮮で展開された人類愛善運動は、内田や王仁三郎が主導していた皇道宣揚運動の影響を強く受けたものとなつていった。

以上のような観点から、本稿では、まず王仁三郎を中心に大本教で唱導された皇道論の内容について考察する。さらに一九三四年に設立された人類愛善会朝鮮本部に焦点を当てながら、王仁三郎と内田との提携を通じて、大本教が朝鮮内でのような宣教活動を行ったのか明らかにする。従来の大本教研究では、日本史の分野から主に王仁三郎のカリスマ性に焦点を当てた研究が行われてきた<sup>⑦</sup>。本稿では、内田良平の支援のもとに大本教が朝鮮で行った皇道宣揚運動と人類愛善会の活動について、朝鮮史の視点からその特質を明らかにする。

### 一、昭和初期における皇道宣揚運動

大本教の皇道論について論じる前に、ここではまず、戦前期の日本で展開されていた皇道宣揚運動について考察しておくことにしよう<sup>⑧</sup>。

戦前の代表的な皇道論者の一人に河野省三（一八八二～一九六三）がいる。彼は、埼玉県の玉敷神社で神職をつとめながら神道学者として活躍した。一九二〇年に国学院大学の専任教授となった後、一九二七年に国学院大学神職部主任、皇典講究所協議員をつとめ、一九三二年には国民精神文化研究所研究員を嘱託された。彼は一九四二年に『皇道の研究』という著書を刊行したが、その中で「我が皇国に在っては、万邦無比の此の国体に即して皇道の信念が確立してゐる。皇道は実に我が国体と密接不離の關係に於いて進展しつつかある天皇の大道<sup>⑩</sup>であると述べている。この一文に示されているとおり、戦前期の日本において「皇道」は「皇国」という語とセットにして、「国体」とほぼ同じ意味合いで用いられた。

しかし、歴史的にみるとこの言葉はかなり古くから使用されており、「建武の新政」の頃に伊勢神道の影響を受けた神道家や国学者の間で用いられた「神皇の道」という語に由来するものであるとされている<sup>⑪</sup>。伊勢神宮外宮の神官として伊勢神道を大成した度会家行は、南北朝の動乱で南朝方を支援した。度会に師事し、彼の撰した『類聚神祇本源』などから影響を受けた北畠親房は、『神皇正統記』の冒頭において「大日本は神国なり。天祖始めて基をひらき、日神ながく統を伝え給う。我が国のみ此の事有り、異朝には其の類無し。此の故に神国と云ふなり」と述べ、さらに「上古は神と皇と一に御座し」（巻二「皇極天皇」条）として「神皇の道」を説いた。ここでいう「神皇の道」とは、「神」である天照大神を祀る「神道」と「皇」である天皇を崇敬する「皇道」は一体であるという信念をあらわしたものである。

これ以降、「神皇の道」という語が他の神道家や国学者の間にも広まっていた。例えば、室町中期に唯一神道を称えた吉田兼俱は、『名法要集』において「我が国天照大神以降、神以テ神二伝へ、皇以テ皇二伝フ。

皇道神道豈ニナラム哉」と述べて、「神皇の道」すなわち神道と皇道が一体であることを説いた。また平田篤胤の復古神道では「神皇の道」を「皇神の道」と称したが、この言葉も国学者や神道家の間に広まっていた。

その後、幕末になると、後期水戸学（会沢正志斎の『新論』など）の影響を受けて、日本は万世一系の天皇によって統治された神国であるとする「国体」の思想が唱えられた。これにより、国学者や神道家の中には神道と皇道を一体とみなしつつも、皇道の方をより強調する者があらわれた。例えば、信州松前藩の長谷川昭道は『皇道述義』（全七巻、文久元年（一八六一）年）を著して「神皇の大道」を説きつつも、皇道にその本義があることのみをなした。

このような傾向は明治維新以後、国体論の定着にともなつてより強くなっていった。明治二（一八六九）年五月に明治天皇が自ら重臣を集めて、「我皇国、天神天祖、極ヲ立、基ヲ開キ給ヒシヨリ、列聖相承、天工二代リ、天職ヲ治メ、祭政維一、上下同心、治教上ニ明ニシテ、風俗下ニ美シク、皇道昭々、万国ニ卓越ス」（『皇道興隆の御下問書』）と宣布したことからも、そのことがうかがえる。しかし、明治期に提唱された皇道の理念は、建武新政期に唱導された「神皇」思想をそのまま継承したものであり、神道（あるいは「惟神の道」とほぼ同じ意味の用語として用いられていた。この時期はまだ近代天皇制の創成期であり、日本国内における国家統合のためのイデオロギーとして皇道の理念が用いられたといえよう。

その後、昭和の時代に入ると、皇道という語が盛んに用いられ始めるようになった。その理由の一つとして、陸軍の内部で皇道派と呼ばれる一派が台頭し始めたことがあげられる。この一派は、大正末期から昭和初期に勢力を有した宇垣一成閥に対抗して形成された派閥であり、皇道

という言葉を採用したことからその名が付けられた。この一派の中心人物である荒木貞夫が一九三二年末に陸軍大臣に就任すると（在任期間一九三二年二月～一九三四年一月）、皇道派は陸軍内で主導的立場に就いた。荒木を中心とする皇道派は、政党政治を否定して天皇親政論を掲げ、皇道・皇軍・皇漢・皇威・皇猷と、「皇」の字を冠した熟語を大量生産しながら、軍隊組織の中に皇道精神を注入しようとした。

満洲事変の勃発後、一九三二年三月に満洲国が建国されると、その承認をめぐり日本は一九三三年三月に国際連盟を脱退した。これを機に日本社会の中で軍国主義的風潮が高まると、荒木陸相は国民の間で大きな人気を得、荒木も持ち前の饒舌さで盛んに皇道を宣揚していった<sup>⑭</sup>。一例をあげると、日本が国際連盟を脱退した年である一九三三年に『皇道維新と荒木イズム』という本が出版されている。本書では、荒木による皇道宣揚運動を「荒木イズム」と称しながら、「皇軍」の精神は「皇道」の宣揚にあり、「大和魂」こそ「皇道の大本<sup>たいほん</sup>」であると述べながら、明治維新は「王政復古」であり、昭和の今日は「皇道維新」が必要であると訴えている<sup>⑮</sup>。このように、軍部皇道派による皇道論の宣揚にともなって「昭和維新」というスローガンが盛んに唱道されていった。

また、一九三五（昭和一〇）年に美濃部達吉の天皇機関説に端を発して、それに反対する「国体明徴運動」が大々的に展開された。これにより国体と同義語であった皇道という用語の使用例が増加し、皇道宣揚運動は日本社会の中にもますます深く浸透していった。

このような皇道宣揚運動は、ただ軍人だけに限ったものではなかった。民間でも、とりわけ神道家をはじめとする宗教人や国学を専門とする学者たちが皇道論を盛んに説いていった。そのうちの一人として今泉定助（二八六三～一九四四）をあげることができる<sup>⑯</sup>。今泉は東京大学古典講習科出身の国学者で、大正から昭和前期にかけて神道界の大御所として活躍

した。一九二四年九月には、頭山満、杉山茂丸、葦津耕次郎らと今泉が発起人となり、神宮奉斎会の附属団体として敬神護国団が設立された。この団体では敬神崇祖や祖先祭祀の重要性を説き、全国各戸に神明造の神棚安置を推奨する運動を展開した。その後、一九二八年一月に結成された日本皇政会を母体として、一九三三年九月に皇道発揚会が設立された。今泉は同会の総裁をつとめ、顧問に頭山満、荒木貞夫らを迎えて「皇道ノ本義ヲ発揚シテ教育ノ根本ヲ樹立」（綱領）する運動を展開した。

また一九三七年六月に日本大学内に皇道研究所が設置され「日本大学皇道講座」が開講された。これをもとに一九三九年四月に皇道学院が開講され、今泉はその学院長に就任した。さらに今泉は一九四〇年八月に設立された皇道社の総裁をつとめ、皇道宣揚運動を展開していった<sup>⑰</sup>。彼は皇道に関する論著を多数刊行し、『皇道の真髓』（一九三四年）、『皇道講話』（一九三四年）、『皇道原理』（一九三五年）、『皇道精神を以て思想界を浄化せよ』（一九三五年）、『皇道の本義』（一九四一年）、『皇道論叢』（一九四二年）、『世界皇化の聖業』（一九四二年）といった単著を出版している。

その他、東洋史学者の白鳥庫吉も皇道論を説いている。例えば、「皇道と国体」（一九二八年）という論説で次のように述べている。

支那には儒教があり、印度には仏教があり、西洋にはキリスト教がある。そのやうに我が国にも一つの道がなくてはならない。そして立派にこの道があるのである。「…」私はこれを皇道と称するのが一番適当であらうと思ふ。「…」皇道とは、天祖天照大神をはじめ奉り、御歴代の天皇を崇め尊ぶ教であり、そしてその聖旨、勅語等に遵ひ、御業蹟を手本とする教である。儒教の本尊が孔子であり、仏教の本尊が釈迦牟尼仏であり、キリスト教の本尊がエス・キリストであるやうに、皇道の本尊は天皇であらせられる。それで皇道はまた天皇教と申して

も差支ない。「…」今日の時代に於て、天皇を神であらせらるるといっても、その言は決して奇矯ではない。歴史の実在である、エス・キリストや、釈迦牟尼仏を神として尊崇することが無意味でないならば、我々日本人が天皇を神として崇拜することは、少しも誤りではないのである。「…」しかし我が国と諸外国との間には大きな相違がある。即ち外国の教では、この現神は一世一代ただ一度現はれたのであるに反して、我が国では現神は天皇であつて、その御子孫は連綿として万世一系天地と共に窮りがない。「…」我が国では、皇室は神の御子孫であらせられて、天皇はいつも現神で在しますといふ信仰が永久にゆるぎないのである。<sup>⑩</sup>

ドイツ流の厳密な実証主義史学を東洋史研究の分野に導入したことで知られる白鳥庫吉は、まだ戦時下にも入っていない一九二〇年代の段階でこのような皇道論を唱えていたのである。

また、宗教学者の加藤玄智も、専門である神道研究の立場から皇道論について論じている。例えば、『神道の再認識』（一九三五年）では、神道の有形面を「神社神道」、無形面を「国体神道」と称し、この二つを合わせたものを「国家的神道」と命名した。その上で、「神皇に対し奉る絶対的奉仕の精神の宗教的活動方面を国家的神道と名づけ、その倫理的活動方面を皇道と謂ふ」と定義付けている。そして、「日本の天皇は、元是れ神皇に在して、天皇の御一身に神と皇、即ち神性と人性とが渾然として融合帰一し、同一体となつて現存してをるのであるから、「…」此に我が皇道と神道（国家的）の事実、分つ可からざる原因が存する」と論じている。このような考え方は、建武の新政期に提唱された「神皇」論の粹組みをそのまま継承したものであるといえよう。

このように日本社会全体で高揚した皇道論は、一九四一年の太平洋戦

大本教の皇道宣揚運動と人類愛善会朝鮮本部の設立

争を通じてその絶頂に達した。一九四一年（昭和十六）年二月八日、日本は英米に宣戦布告したが、それに先立ち、東条英機（当時は陸軍大臣）は同年一月に『戦陣訓』を示達した。そこでは最初に「皇国」、次に「皇軍」の条が設けられ、天皇に直率される「皇軍」は「神軍」であり、そこに属する軍人は「神兵」に他ならないと説きながら、戦争を鼓舞した。そして太平洋戦争が勃発すると、民間人も盛んに皇道論を喧伝していった。例えば、民友社のジャーナリストである徳富蘇峰は一九四二年に『宣戦の大詔』を発表した。そこでは北畠親房の『神皇正統記』を取りあげて、「我が国は、世界古今に比類無き（…）神国すなわち皇国である。その現御神たる天皇によって治められる皇国に住める我等は、すなわち皇民である」と述べ、皇道の実践としての戦争遂行が叫ばれている。

また、太平洋戦争期に皇道論を高唱した代表的イデオログとして、国学院大学教授で文学博士であつた河野省三をあげることができる。先に述べたように、河野は一九四二年に『皇道の研究』を発行したが、そこで次のように述べている。<sup>⑪</sup>すなわち、「皇道は（…）新に展開すべき大東亜共栄圏の指導精神の由つて出づる所である」（二頁）、「大東亜戦争は民主主義思想に対する皇道精神の宣揚である」（六三頁）、「大東亜戦争は正に、皇道精神燦として米英の民主主義、個人主義を撃墜破し、日本精神の精髓いよいよ發揮せられ、武士道の精華ますます其の光を輝かしつつある」（六四頁）、「日本精神の本質であるところの（…）皇道精神は八紘一字の光源であつて、皇道は即ち惟神の大道であり、神ながらの信念の具現である」（七九頁）と述べている。

このようにして皇道という用語は、昭和初期におけるファシズムの進展とともに、対内的には個人主義・自由主義の撲滅と天皇への絶対的帰一を要求するものとして、また対外的には日本軍の軍事侵攻を正当化するイデオロギーとしての役割を果たした。明治期に国内における国民統

合のために提唱された皇道は、「八紘一字」「皇道外交」「世界皇化」などのスローガンとともに、日本軍による膨張主義的な対外進出や侵略戦争を支えるための「ファシズム的国教」へと最後の発展段階を遂げていったのである。

## 二、大本教の皇道宣揚運動

昭和期に入って本格化した皇道宣揚運動は、宗教界に大きな影響を与えた。大本教もその例外ではなかった。大本教における皇道への傾倒は、王仁三郎がもとと神道・国学思想や国体論に共感を寄せていたことによる。王仁三郎は出口なおと出会う前に、長沢雄楯ながさわゆうたての稲荷講社で鎮魂帰神法をはじめとする霊学修行を行っていた。その霊学とは、水戸学と平田篤胤との影響を受けた国学系神道家である本田親徳ほんだちかあつの流れを汲むものであった。

また大本教に入信した後、王仁三郎は神社の神官になろうと志し、一九〇六（明治三九）年に京都の皇典講究所分所に入學した。翌年に同所を卒業して京都府庁の神職試験に合格し、官国幣社の禰宜・主典の資格を取得した。そして一九〇七年五月に京都市内の建勲神社の主典をつとめ、同年一二月に京都府伏見の御嶽教飯大本庁主事をつとめた。こうして王仁三郎は、神社神道と教派神道の運営方式について学んだ後、一九〇九年に綾部に戻って大日本修齋会を設立した。その際、天之御中主神、国常立尊をはじめ天神地祇八百万神の神々を奉齋し、新年祭・紀元節・神武天皇祭などの国家的祝日を教団行事として導入するなど、神道に準拠した教団体制作りを行っていた。

そして大正期に入ると、大本教は「大正維新」による「立替へ立直し」を掲げて、軍人や知識人階層から大きな賛同を得た。一九一六年には横

須賀海軍機関学校英語教官の浅野和二郎が大本教に入信した。王仁三郎は浅野を大日本修齋会々長となし、教団は大きな発展を遂げた<sup>20</sup>。

その際、注目すべきなのは、一九一六（大正五）年四月に教団の名称が「皇道大本」と改称された点である。この名称に端的に示されているように、この頃から大本教では皇道の教義を前面に出し始めるようになった。この時、十箇条からなる「皇道大本信条」が定められたが、その第四条で「我等は日本国が世界無二の靈地にして、特に丹波国綾部本宮は、天神地祇の神集ひに集ひ給ひて神律を議定し、古今東西の諸教を帰一して、金甌無缺の皇道を樹立し給ふ、地上の高天原たることを敬信す」と謳われている<sup>21</sup>。

しかし、国体論の核心にまで踏み込んだ、このような煽動的な宣教活動のために、大本教は当局から危険視され、一九二一（大正一〇）年に王仁三郎を含む教団幹部が不敬罪や新聞紙法違反で逮捕されるといふ弾圧を被った（第一次大本事件）。これによって教団名は大本瑞祥会に変更され、皇道の教義もなりをひそめた。

しかしその後、一九三三（昭和八）年一月二六日（旧暦正月元日）に大本瑞祥会を廃止し、教団名が再び「皇道大本」に改められた。同日に発表された「皇道大本信条」をみると、その第四条に「我等は皇上陛下こうじょうが、万世一系の皇統を継承せられ、惟神かむなに主、師、親の三徳を具へて、世界を知らし召さるる至尊しそん至貴しきの現人神あらひとがみに坐ますことを信奉す」と述べられている。また「皇道大本規定」の第一条では、「皇道大本は経緯の神示によって闡明されたる皇道の本義を宣布実践」と謳われた<sup>22</sup>。このように、以前にも増して皇道の理念が強調されるようになっていった<sup>23</sup>。

そして、昭和初期から日本社会を覆った軍国主義化の風潮の中で、王仁三郎を中心に大本教で唱導された皇道論は、軍部の皇道派が唱えた皇道論とほとんど同義のものに変容していった<sup>24</sup>。そのきっかけとなったの

が、一九三二年九月一日に起こった満洲事変である。満洲事変が勃発するやいなや、王仁三郎は関東軍による軍事侵攻を全面的に支援する活動を行った。そして満洲事変の真つ最中である一九三一年一〇月に、昭和青年会という外郭団体を新たに結成した(翌年に同会の婦人部が分離して昭和坤生会が結成された)。この団体は大本教の熱心な信者を集めた実行部隊のような団体であり、王仁三郎自身が総裁をつとめた。

昭和青年会では主隊・大隊・中隊・小隊というピラミッド型組織を編成し、カーキ色の制服を着用して各隊に編隊リボンを結び、軍隊式の訓練を行いながら、国防運動と皇道宣揚運動を行った。国防運動に関しては、一九三三年に同会が刊行した『神示の国防』にその内容がまとめられている。その巻頭言で「国防大運動に邁進するは皇道信奉者の最大急務なり」「日本対世界戦の終るまで国防大運動に邁進すべし」と記されているように、皇道を前面に押し出して、世界戦に備えるために日本の国防を訴える内容となっている。

また同会は、内田が組織した大日本生産党やその他の右翼団体と提携して、一九三二年一月四日に京都市岡崎公会堂で「対国際連盟国民大会」を開催し、満洲国の独立が正当であることを訴えた。そして満洲事変発生二周年目にあたる一九三三年九月一日にも、京都市岡崎公会堂において「満洲上海両事変戦病没者慰霊祭」をとり行った。この行事には軍人が大挙出席し、荒木陸相より「陣没将兵ノ英霊ヲ弔フ」という弔電が送られた。<sup>27)</sup>

また、昭和青年会では『昭和』という機関紙を発行した。<sup>28)</sup> 本誌には、陸軍・海軍の軍人からの寄稿文も数多く掲載された。その中には荒木陸相の記事も掲載されている。その記事では、「皇軍の精神は、皇道を宣揚し、国徳を布昭するにある。即ち一つの弾丸にも皇道が籠ってをり、銃剣の一闪にも国徳が燦然たらざればならぬ〔…〕わが将兵がその死の間

際において『天皇陛下万歳』の叫びをあげ〔…〕世界驚異の行動を執るのである」と述べられている。そのほかにも、「日本は実に国際的足利尊氏に包囲されてゐる形である」として、「建武中興」や「明治維新」の精神を承継した「昭和維新」を訴える記事が掲載されている。<sup>29)</sup> このような事実は、大本教の皇道宣揚運動が陸軍の皇道派と同調する側面を有していたことを示している。

また一九三二年には大本教の外郭団体として大日本武道宣揚会が設立された。この会は、王仁三郎を総裁に頂き、植芝守高(別名、植芝盛平)を会長として組織されたものである。植芝は合気道の創始者として夙に有名であるが、彼は一九二〇年に大本教に入信した後、一九二四年の「入蒙」にも同行した王仁三郎の側近であった。植芝は大神より神授されたとされる「相生流合気武術」を修練するための団体として同会を設立し、本部道場を足利時代の武将・山名宗全の居城である但馬竹田城趾愛善郷に置き、全国に百ヶ所余りの支部を設置した。植芝の武術は軍人から大いに歓迎され、憲兵隊、陸海軍大学、戸山学校、その他軍部に関係する各方面で教習や研究が行われたとされる。<sup>30)</sup>

その他、人類愛善会の活動を通じて、皇道の宣揚が行われていった。人類愛善会は、「人類愛善の大義を発揚し、全人類の親睦融和を来し、永遠に幸福と歓喜とに充てる光明世界を実現する」(「人類愛善会趣意書」)ことを目的に、一九二五年に設立された大本教の外郭団体である。大本教の信者に限らず、いかなる宗教を信仰する者も同会の会員となることができ、国内外の他宗教の信者が多数入会した。日本国内のほかに、朝鮮・台湾・満洲国・中国をはじめ、南米・北米・南洋などの各地に連合会・分会・支部が設置された。

人類愛善会では一九二五年一〇月から機関紙として『人類愛善新聞』を発行した。最初の発行部数は約一万部であったが、一九二八年頃に

二万六千部に達し、その後徐々に発行部数を伸ばしていった。満洲事変を機に一九三二年頃から購読者百万人獲得運動を展開した結果、一九三四年三月に目標としていた百万部の発行を達成したとされる。『人類愛善新聞』は大本教団の大きな活動資金源となったほか、大本教の宣教活動を国内外に喧伝する重要な宣伝媒体となった。『人類愛善新聞』でも日本軍部の対外膨張政策が賞讃され、皇道を宣揚する記事が多数掲載された。

このようにして一九三〇年代に入ってから大本教は、人類愛善会、昭和神聖会・昭和坤生会、大日本武道宣揚会といった外郭団体を通じて、国権主義的な愛国運動を大々的に展開していった。一九三三年四月からは「国体闡明運動」を展開し、伊勢神宮に皇威宣揚の祈願を行い、官庁・軍隊・学校等に天祖・国祖の神霊を奉祀し、朝夕礼拝を行うべきことを提案した<sup>34</sup>。また、これと連動して挙国更生運動・防空運動・国防思想運動を展開し、軍事絵葉書を販売して得た純益金を陸軍省や海軍省に愛国兵器購入資金として献納したりするなど、軍部を支援する活動を行った。また、一九三〇年代に展開された大本教の宣教活動で特に注目したのは、先にも述べたとおり皇道という用語が前面に押し出された点である。これに関しては、大本教の外郭団体が発行した機関紙のほかにも、皇道に関する多くの単行本が出版されていることから確認できる。その際、注目したいのは、昭和初期に大本教で唱えられた皇道論の多くが、皇道大本を称していた大正期にすでに唱えられていた点である。

一例をあげると、一九二〇（大正九）年に「王仁文庫」第一篇として刊行された『皇道我観』が、一九三一（昭和六）年六月に再版発行された。その後、この『皇道我観』（王仁文庫第一篇）とかつて「王仁文庫」第二篇として刊行された『国教論集』とを合本して、『皇道大意』と改題して一九三二（昭和七）年一二月に出版された。また、一九三四（昭和九）年

には『皇道維新と経綸』という本が刊行されている<sup>35</sup>。本書はかつて『神霊界』誌上に、『大正維新に就て』（大正六年二月号）、『世界の経綸』（大正七年一〇月号から一二月号まで）と題して掲載されたのを合併して改題したものであった。このような事実から、大本教で唱導された皇道論が大正期から昭和期にかけて首尾一貫して唱えられてきたものであり、また皇道宣揚運動の目標とされた「大正維新」も「昭和維新」も、その本質において同じものであったことを示しているといえよう。

皇道について記した大本教の論著は数多くあるが、昭和九（一九三四）年六月から昭和一〇（一九三五）年一〇月にかけて発行され、まもなく発禁となった『出口王仁三郎全集』（全八巻）のうちの第一巻「皇道篇」は、皇道に関して王仁三郎が発表してきた論著を集大成したものであり、本書を通じて王仁三郎の皇道論の全容について知ることができる<sup>36</sup>。

本書では、皇道について様々な観点から説明されているが、その最大の特徴は「神道」と「皇道」を明確に分けた上で、神社神道や教派神道一三派について「至粹至純なる皇祖の教示し給ひたる真正の教理に非ず」（六一頁）と批判しながら、「皇道」を「神道」に優るものと提示している点である。そして、「皇道大本は〔…〕皇国国体の尊厳無比なる真理を了得せしめ、忠孝両全の日本魂を涵養し、錬磨せしめむとする教底なり」（五四頁）として、「皇道」の優越性を力説している。

王仁三郎が説いた皇道論は、他の信者にも共有されていた。とりわけ大本教の精鋭部隊である昭和青年会では、王仁三郎式の皇道論がそのまま唱道された。昭和青年会の代表は元軍人の有留弘泰がつとめたが、彼は『皇道宣揚』（一九三四年）を出版し、「皇道精神、皇道国防、皇道外交、皇道経済等々、皇道によって一蹴し去った暁には、日本皇国は世界の指導者となるのであって、今や日本は皇道日本と皇道世界を建設すべき労作の中途にある」と訴えた<sup>37</sup>。



また一九三三年には、同じく有留弘泰によって、昭和青年会会員のためのポケット版携帯冊子として『皇道の葉』が作成されている。<sup>42</sup>本書の第六章「昭和維新」では、「昭和維新とは日本の皇道による世界統一を指す」（二七三頁）、「明治維新は日本を舞台とし、昭和維新は全世界を舞台とする」（二七四頁）と述べられ、「昭和維新の指導原理亦明治維新と等しく、大日本主義の発揚即ち皇道の宣揚によらねばならない」（二六九頁）と記されている。さらに第八章「昭和青年会」では、「昭和青年会の指導精神は終始『万邦無比にして至尊至嚴なる皇道の本義』に基くものであり」（四五八頁）、「唯皇道あるのみ」これが昭和青年会の指導精神の根本真髓である」（四五八頁）と締め括られている。このように、満洲事変の勃発から第二次大本事件が起こるまでに刊行された大本教の論著には、皇道という言葉が溢れており、すべての宣教活動が皇道の宣揚に収斂していったといっても過言ではないほどであった。

### 三、内田良平による大本教への接近

王仁三郎の主導のもとに展開された大本教の皇道宣揚運動には、強力な支援者があらわれた。日本の代表的右翼として活動した内田良平である。<sup>43</sup>内田は、箱田六輔・頭山満の両雄と併せて玄洋社の三傑と称せられた平岡浩太郎の甥にあたる人物であり、一九〇一年に日本の対外進出を目指す国権主義団体として黒龍会を組織し、その主幹をつとめた。一八九四年に発生した東学党の乱（甲午農民戦争）に際して、同志と共に朝鮮へ渡り天佑俠を組織して東学党を助けた。以来、朝鮮との関係を深め、一九〇五年に統監府政治が始まると、初代統監となった伊藤博文の招聘により統監府嘱託となった。その傍らで、東学系の親日団体である一進会を背後から操縦して日韓合邦運動を推進したことでよく知られて

いる。しかし、一九一〇年代以降における内田の活動はあまり注目されていない。ここでは、一九一〇年代以降に内田が行った活動についてまとめながら、内田が王仁三郎と出会うまでの経緯について考察してみたい。

一九一〇年に韓国併合が実現されると、一進会は朝鮮総督府の命令によって解散させられた。一進会は「日韓合邦」を進めようとしたが、それを日本と韓国の対等な連合（政合邦）と理解していた一進会会員たちは、運動が結果として日本側の一方的な植民地併合という形で結末したことに大きな不満を持った。そして、一九一九年の三・一運動によって独立気運が高揚すると、日本に対する不信を募らせてきた元一進会会員たちは、内田に対して植民地支配の責任を鋭く追求する動きを見せた。

これに対して内田は一九二一年に同光会という団体を組織した。<sup>44</sup>この会は内田が幹事長となって「内鮮融和」を目的に結成された団体であった。同光会では朝鮮に支部を設けて朝鮮内政独立期成会を組織し、一九二二年に日本の帝国議会に「朝鮮内政独立請願書」を提出した。しかし、同会が主張した「内政独立」とは、天皇陛下の統治下で外交・軍事を除外した一切の内政を独立させるというものであり、朝鮮人の真の独立要求に妨害の雑音を加えるものであった。なお「朝鮮内政独立請願書」は、檀君教の教主である鄭薫模が代表者となって四〇余名の署名をまとめて提出している。<sup>45</sup>

この時、鄭薫模は請願書を提出するために日本を訪問した。その時の様子が日本の新聞でも報道されている。その記事によると、「天皇陛下統治の下に朝鮮の内政独立」を請願するために朝鮮四〇余団体の代表鄭薫模氏外六名が来日し、「一九二二年」三月一四日に同光会の主催で招待会が開催された。その会には、頭山満、押川方義、荒川五郎をはじめ一二〇余名が出席し、寺尾亨の挨拶の後、鄭薫模の答辞、内田良平・板倉中・

李喜侃らの演説が行われたと報じられている<sup>46</sup>。これを機に、頭山と内田は檀君教の信徒らと関わりを持つようになった。またこの記事に記されている李喜侃という人物は、元一進会の会員であり、同光会朝鮮支部の幹事長として「朝鮮内政独立請願書」の提出を背後で周旋した人物であった。これに関しては、また後で詳述する。

また内田は、大陸浪人の末永節が一九二二年に結成した肇国会のメンバーとなった。末永節はもともと中国問題を専門とした玄洋社系の活動家であったが、間島問題をはじめとする中国領内の朝鮮人問題に関心を抱き、その解決策として「大高麗国」の建国を構想した<sup>47</sup>。「大高麗国」とは、その名が示すとおり、東北アジア諸民族の中で最大の領土を獲得した古代の高句麗を復活させようとしたものであった。

韓国併合後、間島（中朝国境の豆満江北岸）地域は抗日独立運動の一大拠点となっていたが、一九一九年の三・一運動後、多くの朝鮮人亡命者が結集して抗日武装闘争が展開されていた。末永が提唱した「大高麗国」は、このような朝鮮人運動家（日本側は「不逞鮮人」と称した）による抗日独立運動を沈静化させる親日工作の一つとして進められた。ちょうどこの頃、日本軍部や大陸浪人らが中心となって、満蒙地域を中国本土から分離して、これを日本が軍事支配し、迫り来るロシアの赤化の波に対する防波堤にしようとする計画が画策されていた。これと連動して、末永は在満朝鮮人運動家を前面に押し出して、満洲に新しい自治国家として「大高麗国」を建国させ、排日感情を慰撫して抗日独立運動を抑制すると同時に、朝鮮や日本の共産化を防止するための緩衝国にしようとする計画を立てたのである。

肇国会とは、このような「大高麗国」を建国するための団体として組織されたものであり、南北満洲・内外蒙古・バイカル州以東の地域を連結し、これを世界的中立国とすることを目指すものであった<sup>48</sup>。また肇国会

会には、内田良平も賛同者として入会した。もともと内田は末永と姻戚関係にあり、両者は昵懇の仲であった。そのために内田は、末永に旧一进会側から韓国併合の責任を追求されている窮状を訴えた。その結果、末永によって朝鮮人の反日感情を緩和し、彼らの独立意志を満足させる新しい国家として構想されたのが「大高麗国」であった<sup>49</sup>。一方、末永節は内田の要請を受けて同光会の幹事に就任している<sup>50</sup>。このことからわかるとおり、内田による同光会の朝鮮人親日懐柔工作と、末永の「大高麗国」構想とは、密接に関連し合ったものであった。

しかしながら、同光会の活動はこれといった進展もなく、また肇国会による「大高麗国」建国構想も途中で有耶無耶となってしまった。一言でいって、韓国併合後から一九二〇年代前半にかけて内田が朝鮮で行った活動は一つも結実せず、ことごとく失敗に終わった。そのような中で、内田は大本教の出口王仁三郎と出会うのである。

内田が王仁三郎と接触した経緯に関しては、第二次大本事件後に、内田が大本教の立場を擁護するために書いた『時代思想の顕現せる天理教と大本教』の中で詳しく述べられている<sup>51</sup>。それによると、内田が大本教に関心を抱くようになったのは、彼の親友である花井卓蔵がたまたま第一次大本事件の弁護人をつとめ、また東学党の乱の時に組織した天佑侠の同志である大崎正吉が熱心な大本教信者となり、彼らを通じて王仁三郎の非凡な才能について聞き知らされたからであったとされている<sup>52</sup>。

その後、一九二五年一月に大崎の案内によって、内田は黒龍会会員を引き連れて綾部の大本教本部を参拝し、王仁三郎と面会した<sup>53</sup>。これがきっかけとなって、内田と王仁三郎は緊密な交遊関係をもつに至った。また、内田は自らが師と仰ぐ頭山満を王仁三郎と引き合わせ、これによって頭山も交流の輪に加わり、内田と頭山と王仁三郎との間に緊密な連携が持たれるようになった。これに関して、内田は一九三〇年に大阪で行われ

た講演会の中で、「余は氏〔王仁三郎を指す…引用者〕の思想に触れて狂せんばかりに喜び師父の如く仰いで居る頭山満先生に出口氏の人と為りを説き、まもなく両雄を会見せしむる事が出来た。出口氏は国家の宝であるとは頭山先生の評だ」と当時の様子を述懐している。<sup>54</sup>

また一九二九年一月に頭山と内田は、頭山の息子である立助や泉、また末永節ら黒龍会の幹部数名を引き連れて、鳥取にあった大本教神州別院に滞在中の王仁三郎を訪ね、一行総出で出雲大社を参拝した後、頭山は綾部の大本教本部を訪問し、世間の注目を集めた。<sup>55</sup> その際、頭山は「此の大本の団体のあることに依つて自分は死すとも心のこりが無い」と語り、また、内田も歓迎会の席上で、「吾々は大本の教団と手をつなぎ、聖師〔王仁三郎を指す…引用者〕のかかる教えによって、すすんで国家のためにはたらくたい」と演説するなど、両者とも王仁三郎に絶大な期待を寄せた。<sup>56</sup>

それでは、内田が王仁三郎に共鳴し、大本教の活動に吸い寄せられていった理由は何だったのであろうか。これに関して黒沢文貴は、①神道に対する親近感、②大本教の組織と資金力への期待、③大陸進出、④国家改造、といった四つの理由をあげている。<sup>57</sup> この中でも特に注目したいのは、内田が大本教の「大陸進出」に大きな関心を寄せていた点である。これに関して内田は、海外諸宗教との提携という王仁三郎の宣教方式について様々な場面で絶賛している。とりわけ道院・紅十字会との提携による中国大陸への進出に関して、内田は既成宗教には出来ない大本教の快挙として大きな期待を寄せた。そして一九三〇年代になると、「黒龍会が今日迄世界各国に向つて皇道精神を了解せしむべく苦心施設したる各種外国団体の如きは、挙げて大本の愛善運動に合流せしむべく期待」<sup>58</sup> するというように、内田がそれまでに設立してきた外国諸団体を大本教に全面的に託そうとまでしたのである。ここでいう外国諸団体とは、具

体的には一進会や同光会のことを指すが、これに関してはまた後で詳しく論じることとする。

また王仁三郎の方も、内田を通じて政財界の広範な人脈を得ることができたほか、特に内田が大陸浪人の諜報活動を通じて得た中国や朝鮮に関する機密情報は、大本教の海外宣教活動において大きな役割を果たしたと考えられる。こうして内田と王仁三郎は、それぞれ政治と宗教という互いの領域で協力関係を保ちながら、一九二〇年代後半から三〇年代にかけて両者一体のような運動を展開して行った。

内田は一九三一年六月に「大日本主義ヲ以テ国家ノ経綸ヲ行フ」<sup>59</sup> ことを目的に、大日本生産党という国家主義団体を結成した。その際も、王仁三郎側から活動資金の援助が行われたとされている。当時の状況を考えてみると、社会的な名声こそ内田の方が優つてはいたものの、信徒数・資金力・外郭団体の数・海外活動拠点の数と規模など、組織面においては大本教の方が優つていた。<sup>60</sup> そのため、両者の協力関係は必然的に、大本教を母体とした王仁三郎の活動を内田が背後から支援するという形をとるようになった。

一例をあげると、大本教は普遍的人類愛の実現というスローガンを掲げて人類愛善運動を展開したが、内田はその機関誌である『人類愛善新聞』に多数の記事を寄稿した。また、同会が主催する講演会の講師をとめるなど、人類愛善運動を全面的に支援した。これらの活動を通じて内田は、「出口氏は本会を中心として亜細亜、欧米の各信仰団体をリードし現に三千万の民衆を引摺つてゐる。自分等は数十年来頭山満翁等と俱に日華親善に奔命したが悉く失敗に終つた。然るに出口総裁は数ヶ年の間に精神的融和に成功した」と述べ、王仁三郎を「世界平和を確立する処の大先覚大聖雄」<sup>61</sup>、「不世出の大救世主」<sup>62</sup>、「現今に於ける弘法、生きて活動してゐる弘法」として絶賛した。これらの記事は、大本教の機関紙

に掲載されたもので多少の誇張はあるだろう。しかし、内田が大本教の組織力を利用するために、王仁三郎のカリスマ性を盛んに賞賛したことをこれらの記事を通じて確認することができる。

#### 四、出口王仁三郎と内田良平の皇道論

##### (一) 日本型華夷思想としての皇道論

内田と王仁三郎が互いに惹かれ合った理由の一つに、両者が共に皇道の信奉者であったことがあげられる。王仁三郎が唱えた皇道論については先に考察した。ここでは、王仁三郎の皇道論と比較しながら、内田が提唱した皇道論について考察してみることにしよう。

先に述べたとおり、皇道という語は、幕末維新时期における国体論の台頭とともに浮上してきた用語であった。明治初期に民権論を破棄して国権論を高唱した玄洋社でも、早くから皇道によるアジア進出が説かれていた。これに関して、衆議院議員でジャーナリストの吉田頼明が著した頭山満の伝記には、頭山が西郷隆盛の征韓論について「其の真意、其大目的は、我が皇道を、我が正義を、亜細亞大陸に布くためであった」と述べたことが記されている。そして、「〔頭山〕翁の大陸政策は五十年來一貫して居る。吾日本が東洋の盟主として隣邦と互助聯環東亜全体を日本の皇道に化せしむること。東洋を打って一丸とせる皇道樂土を建設しやうと云ふのが、翁の理想のようだ。所謂皇亞細亞の建設が理想である。進んで皇世界の建設である」と述べられている。<sup>68)</sup>

このような玄洋社および頭山満の思想から、内田は大きな影響を受けた。特に内田が一九〇一年に結成した黒龍会では、ロシア・中国・滿蒙・朝鮮など大陸での対外工作活動を行ったが、その際、皇道の理念がいわ

ゆる「大アジア主義」思想と結びついて唱えられた。<sup>69)</sup>

しかし、内田の場合、ちょうど王仁三郎と交流を行い始めた頃から皇道論を盛んに唱えるようになった。それは王仁三郎からの影響であったと考えられる。これに関して、内田の皇道論を集大成した『皇道論に就いて』（一九三三年）において、王仁三郎の学説を引用しながら大本流の皇道論を展開していることから確認できる。<sup>70)</sup>

そして、内田の皇道論で注目すべきなのは、王仁三郎が説いた「皇道国教論」からの影響を強く受けている点である。王仁三郎は早くから「国教樹立論」を提唱した。これに関しては、先にあげた『出口王仁三郎全集』第一卷「皇道篇」の第三篇「国教論」の中で詳細に論じられている。また、王仁三郎は昭和青年会の活動を通じて、「国教樹立を以て昭和維新の最大問題」とであると訴え、「昭和維新」の目標が「国教樹立」にあると主張した。ここで王仁三郎が「国教」と称しているのは、一言でいって皇道に他ならなかった。

これと同様に内田も、皇道を国教とする「昭和維新」論に賛同し、それを助長していった。これに関して、内田は一九三四年に『対外国是樹立の急務』という冊子を発行している。<sup>71)</sup>そこでは「国教問題の精細なる立論に至っては、出口王仁三郎氏全集皇道篇中の国教樹立論に尽されて居る」（二七頁）として、王仁三郎の「国教論」を直接引用しながら、自らの国教論を展開している。そして、難問が山積みした日本において、「宗教を国教によりて綜合統一するの大覚悟」（一一頁）が必要であり、「各宗教を統一し信仰を一にせしむる大威力を有するものは、唯だ我が惟神の皇道を措いて他あるなし」（二四頁）として、皇道を日本の国教とすべきであると説いた。

ただし、ここで注意しておかなければならないのは、皇道を「国教」と称してはいるものの、皇道は単に日本の国内だけにとどまらず、それ

を全世界にまで及ぼすことが必要であるとして「皇道による世界統一」が説かれている点である。これに関して内田は、『対外国是樹立の急務』において、「皇道文明を世界に布き、全人類救済の挙に出づるならば、独り日本の危機を脱するを得るのみならず、世界の大不安を解消し、永久平和の基礎を確立する」(八頁)ことができるとし、次のように語っている。

「皇道」といふものは、ヨーロッパ人は「帝国主義」のやうに解してゐるが、「…」日本の皇道は、太陽の光といふことである。「…」即ち日本の天皇は、善悪に超越していらつしやる。「…」これが皇道である。「…」分りやすいやうに言へば、キリストの人類愛、世界同胞主義とも言へよう。「…」この世界統一といふことは、この皇道の精神目的をいふのだ。「…」西洋では口先丈けで言つてゐる同胞主義であるが、日本に於てはそれが実際に行はれてゐる。「…」我々の皇道が世界に光被されれば、世界全人類みな同胞であつて、他人が無いことになる。それが実現されて、ここに始めて世界統一が出来て、全地球の樂土が生れて来るのぢやないか、我々はこの統一を言つて居るのだ(三八〜四〇頁)。

ここで皇道を「太陽の光」に譬えているように、内田が主張する皇道とは、日本が同心円の中心にあつて、その中心から周辺へと天皇の愛情が流れ出していく世界であつた。それはまた、「天皇」という神聖な支配者を崇拜し、その神聖性から生ずる福音を周辺に広めて「皇道」による「世界統一」を行うということの意味した。

このような思想は、江戸時代の後期水戸学などで唱えられてきた「日本型華夷思想」を踏襲するものであつたといえよう。ただし、内田の場

合、王仁三郎の皇道論から強い影響を受けている点に留意する必要がある。実際に、王仁三郎が主導した大本教においても、皇道による「宗教的次元での世界統一」が目指され、これが日本民族に与えられた神聖な使命であると認識されていた。

このような「皇道による世界統一」という思想は、一九三一年の満洲事変以後、軍国ファシズム化を一気に加速化させていった日本の対外膨張政策と軌を一にするものであつた。これに関して、満洲国独立の翌年(一九三三年)に、王仁三郎自身が『人類愛善新聞』の中で次のように述べている。

わが天津日嗣天皇が豊葦原の瑞穂国(全地球上)を道義的に統一せらるる機運は今や刻刻に進みつつあるのである。即ち日本国の皇道の光が八紘に輝く時が到来したのである。「…」今や天運循環の神律によつて、日本が世界を統一すべき時機が到来したのである。然らば日本は何によつて世界を統一し、指導して行くか。曰く、皇道即ち惟神の大道によるのである。この道以外には、現代の難局を打開し、今後の世界を統一すべき道は、断じてないのである。<sup>②</sup>

このようにして王仁三郎は、日本の孤立化という難局を打開するためには、「皇道による世界統一」しかないと訴えた。またこの記事では、日本が対外戦争を行う際に盛んに唱道された「八紘一字」のスローガンが言及されている点にも注目すべきであろう。

このように日本を太陽にみたてる思想(「日本型華夷思想」)は、大本教の信徒たちが共有する信念であつた。これに関して、例えば、芦田萬象が一九三三年に刊行した『救世と皇道大本』では次のように述べられている。<sup>③</sup>「日本は地上の太陽、即ち豊葦原(世界)の中津国なかづくくにであります。世

界の文化が日本精神に依つて更生する所以は、大中心（太陽）に正しく従ひて宇宙の生成化育があると同一でありまして、実に大日本精神は太陽精神であるからであります」（二四頁）。そして、王仁三郎の言葉を引用しながら次のように述べている。

斯くて日本の満蒙亜細亜の経綸は神政復古の大運動にして、神武天皇御即位の御詔勅『六合を兼ねて以て都を開き、八紘を掩ひて而して宇と為さむ』の実現に外ありません。日本には侵略と云ふ言葉はありません。唯順はぬ国即ち神を齋らざる国を順はしめる問罪の師があるのみであります。故に皇道の真意を悟らない外国人及び外国魂の日本人には、大和魂を帝国主義的の愛国心位にしか解し得ないのであります。が、此の魂によつて全世界が救はれる日が来るのであります（三二頁）。

このように日本書紀に出てくる「八紘一字」の思想を根拠にして、日本の対外進出は「侵略ではない」と訴えた上で、さらに「人類愛善の精神は、大日本皇道の本義と完全に合致するものであります」（二六頁）として、人類愛善運動を「大日本主義（＝大和魂）」を唱道する皇道宣揚運動と同義のものとみなした。

このような主張は、ただ本書だけに限つたものではない。満洲事變の発生から第二次大本事件に至るまでの時期において、大本教の多くの出版物で同じ主張が繰り返されている。例えば『人類愛善新聞』では、「日本主義とは皇道の別称であるが、小日本主義と大日本主義とを混同してはならない。小日本主義は皇道ではない。皇道とは天の下に普きの大道である。大日本主義はこれではなくてはならない」、「従来の小日本主義的帝国主義を一掃し、更に大高所に立ちて大日本主義の神勅に応へ奉るべき使命を自醒せなければならぬ」と訴えられている。

このように、大本教で唱道されていた皇道論は、実のところ、「日本主義」を世界にまで拡張させようとする「大日本主義」を意味するものにはならなかった。黒龍会を率いて積極的な対外進出を目論んだ内田良平が、王仁三郎が率いる大本教に接近していったのも、両者の提唱する皇道論がまさに「大日本主義」の実践を目指すものであったからである。

## （二）昭和神聖会による「昭和維新」の唱道

頭山満や内田良平といった右翼の大物が合流することによって、大本教の活動はますます国家主義的な性格を帯びたものになっていった。そして、このような流れの中から、一九三四（昭和九）年七月に昭和神聖会が結成された。昭和神聖会の統管は王仁三郎がつとめ、副統管には内田良平と出口字知磨（王仁三郎と二代教主澄夫妻の三女八重野の夫、本名は佐賀伊佐男）が就任した。このことからわかるとおり、昭和神聖会は、王仁三郎が率いる大本教の大衆動員力と内田の政治力を結集させた右翼団体であった。この昭和神聖会の結成によって、王仁三郎の皇道宣揚運動はその絶頂に達した。

七月二二日の発会大会は九段下の軍人会館で盛大に行われ、内務大臣・後藤文夫（代読）、頭山満（代読）、衆議院議長・秋田清（代読）、大日本生産党・内田良平、陸軍中将・安藤記三郎、政党解消聯盟・松岡洋右、貴族院議長・津村重舎、陸軍中将・渡辺良三、陸軍中将・佐藤清勝などの祝辞演説が行われた。そのほかにも、新日本国民同盟、青年日本同盟、大日本国粋会総本部、大日本愛国青年同盟、大日本関東国粋会など右翼諸団体の指導者がずらりと顔を揃えた。一般国民の中からも同会に対する熱狂的な賛同者が次々と現れ、結成後一年で地方本部二五、支部四一四、賛同者八〇〇万人の大組織に成長し、全国各地での講演会は二八八九回、入場者は百万人を超えた。

同会は、「神聖なる神国日本の大道、皇道に則り、万世一系の聖天子の天業を翼賛し奉り、肇国の精神を遵奉し、皇国の大使命と皇国民の天賦の使命達成を期す」という「主義」を掲げ、「皇道本義に基き祭政一致の確立を期す」、「皇道を国教と信奉し国民教育指導精神の確立を期す」、「神聖皇道を宣布発揚し人類愛善の実践を期す」〔…〕といった「綱領」が掲げられているように、皇道の宣揚を主な目的とするものであった。実際に、全国各地で天皇機関説などを撲滅するための「反国体思想絶滅運動」を展開したほか、一九三五年四月には「皇道講座」を地方本部毎に開催すべき旨の通達が出されている。

昭和神聖会には多くの大本教信者が入会したが、そのなかでも大本教の精鋭部隊として組織された昭和青年会がその主力会員をなした。一九三五年一〇月に、昭和青年会の代表である有留弘泰は『神聖運動』という本を出版し、昭和神聖会の活動について紹介している<sup>80</sup>。その内容を見ると、神聖皇道運動の主義、聖天子による道義的世界統一、皇道政治Ⅱ祭政一致、天下一家の大詔（六合一宮・八紘一宇）、皇化宇内、皇威発揚、皇国の国防といったことが書かれており、最後に結語として、「尊皇愛国は天孫民族の天性である。〔…〕尊皇愛国・敬神崇祖・天皇陛下萬歳を」と締めくくられている。

また、昭和神聖会では『神聖』という機関紙を発行した。本誌には、当時を代表する多数の右翼人士が記事を寄稿している。頭山満（昭和維新断行の秋）『神聖』昭和九年一二月号）や内田良平（『皇国経済考』『神聖』昭和一〇年一月号）のほか、拓殖大学教授をつとめながら言論界で「アジア主義」や「国家改造」を唱えた猶存社の満川亀太郎（『世界各国に錦旗を仰がしめよ』『神聖』昭和九年一二月号）や、陸軍少将で代議士をつとめた江藤源九郎（『不逞美濃部思想を糾弾す』『神聖』昭和一〇年四月号）など軍人からの寄稿文も多数掲載された。

大本教の皇道宣揚運動と人類愛善会朝鮮本部の設立

また『神聖』誌上には、当時、日本社会を騒がせた「皇国国体号」問題に関する記事も掲載されている。一九三五年二月七日、衆議院に対して「皇国国体号確立ニ関スル請願」が提出されて世間で大きな話題となった。請願者の四宮憲章は、一九一九年に皇明会という皇道宣揚団体を創立した人物である。この請願書では、「其の天皇を奉戴する国を称して、皇国（すめらみくに）と謂ひ、其の皇帝又は王を擁立する国を称して「帝国（エンパイヤ）或は「王国（キングダム）」と云ふ。抑々皇国は神意に依りて、肇まりし君主の国にして、帝国は人為を以て建てしところの君主の国なり〔…〕「日本帝国」ではなく「皇国」を正式な称号とすることをお願いする<sup>81</sup>」として、帝国議会や帝国大学など各種機関に冠された「帝国」をすべて「皇国」に変更することを要求した。王仁三郎もこの請願書に賛同して、『神聖』誌上で、「帝国議会は皇国議会でなければならず、帝国憲法は皇国憲法でなければならない」と訴えた。

昭和神聖会が提唱した皇道論の大きな特徴は、「皇道経済」と「皇道政治」による「昭和維新」の実現を訴えた点にある<sup>82</sup>。その内容はきわめて煽動的で過激なものであるが、大本教の各種機関紙を通じてこのような主張が軌を一にして喧伝されていた。例えば『人類愛善新聞』でも、昭和神聖会の活動を紹介する中で、金銀本為制度を排した天皇陛下の御稜威による土地為本経済の確立を目指した「皇道経済」論や、政党政治の悪弊として自由主義の批判を行った「皇道政治」論などが紹介されている<sup>83</sup>。

また、昭和神聖会結成一周年を記念する記事が『人類愛善新聞』に掲載されたが、そこでは、「皇国民は皇国の手足・胴体〔…〕天皇陛下は人間の身体にたとへたならば頭部であり、我々は手足、胴体となって働くべきもので、之が所謂国の身体即ち国体である〔…〕吾等の天皇陛下は天照皇大神様直々の生きた本当の神様である〔…〕天津日嗣天皇の御政

治は〔…〕万民悉くを赤子として愛し給ふ処の御精神の発露であり、御経論である。之が所謂人類愛善の実践である」として、大本教の人類愛善運動を天皇親政の実践であると述べながら、「神政復古」による「昭和維新」という昭和神聖会の目標について解説している。

昭和神聖会が提唱したこのような皇道論は、この時期に王仁三郎が刊行した他の論著でも確認することができる。王仁三郎は一九三四年七月に昭和神聖会から『皇道経済我観』を刊行した後、一九三五年一二月に『惟神の声』を出版した。特に後者の本では、昭和神聖会の活動を「神聖なる皇道愛国運動」として紹介しているが、その中で次のような注目すべき一文が記されている。

皇道精神は国民の国体の再認識に依らねばならぬ。この目的を達成せむとするには、どうしても国家の汚穢物を取除かなくてはならぬ。是れ余が昭和神聖会を創立して天下に獅子吼する所以である。要するに皇道政治、皇道経済の実施によつて一般社会の汚穢物を取除き、これを浄化し、神聖化するにある。余が皇道経済、皇道政治を主唱する所以は実にここにあるのである。

ここでは、王仁三郎自身が「国家の汚穢物を取除かなくてはならぬ」「一般社会の汚穢物を取除き、これを浄化し、神聖化する」と述べている点に注目したい。この記事が記された昭和一〇（一九三五）年頃の時代状況を考慮すると、この一文は一種の「革命」を暗示するものと読むことができる。

当時の状況をみてみると、一九三二（昭和六）年の三月と一〇月に急進派軍部のクーデター未遂事件が起こり、翌（昭和七）年には血盟団事件および五・一五事件が起こっている。このように皇道派軍人による不穏な

動きが社会問題として浮上していた時期において、昭和神聖会は短期間のうちに急成長を遂げながら、軍部の皇道派と結びついて軍事訓練を行うようにさえなっていた。そのために日本政府は、国家主義的変革団体として昭和神聖会に対する警戒感を強め、「昭和維新」の目標を掲げた皇道派青年将校によるクーデター計画と結び付く危険性を疑うようになっていった。とりわけ昭和神聖会で唱導された「皇道経済」論は、農村疲弊対策として土地の個人所有や税を廃止するというように資本主義を否定したものであり、また「皇道政治」論も、議会制民主主義や立憲政治を根柢から否定するものとして、他の国家主義団体が唱導していた「国家改造」論とほぼ同じ内容のものであった。

こうして、ついに警察当局は、昭和神聖会の活動母体となった大本教を徹底破壊することを決定し、一九三五年一月八日に大本関係者を治安維持法・不敬罪・出版法・新聞紙法の違反容疑で一斉検挙した。この時、大本教団の足跡を地上から跡形もなく抹消せんとするほどの前代稀に見る大弾圧が行われ、これによつて大本教団は潰滅状態に陥った。

この大弾圧が行わる以前に、内田良平は病に倒れ病床に伏していたが、この弾圧事件を知ると、政府当局への大きな憤りを訴え、同志である王仁三郎が獄中で呻吟する中で、一九三七年七月失意落胆のうちにこの世を去った。内田は、自らが実現できなかった「皇道による世界統一」という夢を王仁三郎に託そうとした。内田にとつて、第二次弾圧事件による大本教の潰滅は、自らの死を意味するものであったといえよう。

#### 四、大本教と道院・紅十字会の提携と内田良平による支援

一九二三年に関東大震災が発生した際、中国の道院・紅十字会から慰問使節員が派遣され、大本教本部を訪問した。これがきっかけとなって、



大本教は道院・紅卍字会と提携関係を結んだ。反日的・排日的な雰囲気一色であった当時の中国にあつて、社会的な慈善活動を推進した道院・紅卍字会は、日本に対して友好的な態度をとった。王仁三郎は道院・紅卍字会との提携関係を通じて中国大陸への宣教活動を行おうとした。一方、中国の政治動向に詳しくあつた内田も、道院・紅卍字会の活動にいち早く注目し、それを大陸工作の道具にしようとした。こうして内田は、王仁三郎が推進した大本教と道院・紅卍字会との提携関係を背後から積極的に支援する活動を行った。

王仁三郎は道院・紅卍字会と提携関係を結んだ後、それを足がかりとして中国で様々な活動を展開した。一九二五年五月二〇日には北京の悟善社において世界宗教連合会を発足させた。悟善社は、道院・紅卍字会と同じ神を信奉する姉妹団体であつた。このように道院・紅卍字会のネットワークを活用しながら、王仁三郎は世界諸宗教の大同団結という目標を掲げて中国宗教界への進出を試みた。

世界宗教連合会の構成員をみると、中国側からは、道院の代表者である徐世光と悟善社の代表である江朝宗が理事をつとめた。また日本側からは、同会の発起人・賛襄員として、岡崎鉄首・頭山満・内田良平・箕浦勝人・秋山定輔・田中義一陸軍大將らが名を連ねた。彼らは玄洋社・黒龍会系の大陸浪人であり、軍人政治家の田中義一は彼らの大陸工作を背後で支援していた。特に岡崎鉄首は、一九二二年に末永節が設立した肇国会のメンバーであり、一九二四年に行われた王仁三郎の「入蒙」を計画した人物でもあつた。<sup>96</sup>このように、一九二〇年代から内田は、王仁三郎が推進した道院・紅卍字会との宗教連合運動に積極的に関わつた。

その後、一九二八年に張作霖の爆殺事件が起こり、奉天軍閥を継承した張学良が易幟によって国民政府の旗下に入った頃から、大本教は道院・紅卍字会との提携を本格化させていった。一九二九年から翌年にかけて

道院・紅卍字会側から三次に亘つて日本に布道団が派遣され、大本教と道院・紅卍字会は「合同」とまでいえるような深い関係となつた。この時の交流を通じて、大本教の綾部本部には道院の中央主院が設けられ、東京にも道院を設立して日本総院とし、王仁三郎が日本総院統掌に任命された。この時、内田良平が世界紅卍字会日本総会の責任会長に任命され、頭山満がその顧問に就任している。<sup>97</sup>

大本教と道院・紅卍字会との提携は、両者の利害関係が完全に合致した上でなされたものであつた。特に大本教側についてみると、中国内における宣教活動の足掛かりをつくるという目的をもって推進された面が強かつた。このことは、王仁三郎自身、一九二三年に道院と提携関係を持った直後から、「中国道院との提携によって、道院の宣伝使としての資格をもつにいたつた関係から、宗教の布教には障害がない。そこでまず宗教的に進出するのだ」と語っている。また、昭和青年会の機関紙でも、「新興宗教支那道院、世界紅卍字会と合同し、支那、滿蒙に於ける宗教宣伝の自由を獲得するに到つた。〔…〕各国が支那と条約を締結するに當つて先づ第一に布教権を獲得し自国の宗教を支那に布教する権利を得たるに反し、当時の我当局者の不明か、日本のみが支那に対して此の布教権がないのである。〔…〕然るに吾出口師は容易に之を獲得し、蒙古人支那人の教化に全力を尽して居られる」と説明されている。

王仁三郎のとつたこのような方法に対して、内田良平は『人類愛善新聞』のなかで、民国政府が浙江省に建設しつゝあつた天理教会堂の集会説教、使用の禁止を命じたことを報じながら、「人類愛善会は支那の宗教道院、世界紅卍字会を併合してゐるのでは是等を通して宣伝も可能だし〔…〕今更ながら出口総裁の炯眼には只々驚嘆の外無い」、<sup>98</sup>「日本は各国に対し布教権を持たぬが故に支那に対しても精神的指導結合の手段を有せぬ。米国の如きは教会を通じて今日の排日の鞏固なる基礎をなして

る。大本と紅卍字会との合体は日本が孤立せる時に当り隣邦に多数の固き信仰を同ふせる同志を有することの如何に心強きか感ぜずには居られぬ〔…〕今日の大國難を救ふものは出口聖師其人である」と絶賛している。

さらに大本教は、一九三一年九月に滿洲事変が勃発すると、関東軍の動きに呼応するかの様に現地に慰問団を派遣した。その際、王仁三郎は道院・紅卍字会の勢力を利用して、関東軍による滿洲国の独立工作を後方支援した。そして内田もその活動を背後で積極的に支援した。内田は滿洲事変が勃発した直後から、「紅卍字教の偉大な宗教の力は滿蒙の人心を如何やうにも導く事が出来る」と訴え、昭和六年一〇月一日付の『大阪経済新聞』では記者のインタビューに対して次のように述べている。

我輩が是れ迄何故大本教を助けて来たかの理由を語らねばならぬが、我輩の見るところを以てすれば、大本教に非ずんば支那を取る方法がないからぢや。少なくともそれが便利であるからぢや。〔…〕この紅卍字教と云ふのが、即ち日本における大本教のことで、その信徒は五百万人以上ある。支那旧派の人物で師団長、旅団長と云った階級の有力者に多くの信徒を有って居る。彼等は扶乩に対して絶対服従することになって居るのぢや。〔…〕更に驚くべきことは、宗祖の神宣において支那には紅卍字教を日本には大本教を作ったとあり、次ぎに出口王仁三郎の教へに聞けとの御神託もある。〔…〕茲においてか日本の武力を背景として大本教を以て紅卍字教と結ばしめ、然る上にて独立国建設運動を統一せしむることは、日本の対滿蒙政策を遂行せしむる上において最も犠牲の少ない手軽な方法ぢやないか<sup>⑧</sup>

さらに内田は同記者のインタビューに対して、滿蒙地域を統一し中国から独立させるためには、宣統帝擁立が最後には必ず必要になってくるとした上で、その際、まず「人物も多し又宗教的に結合力の強い紅卍字教」によって、混沌とした滿洲地域を親日的な基盤で統一し、最後に宣統帝を擁立して、日本との精神的結合を図っていくというシナリオまで披瀝している。

これと関連して、内田が自ら宣伝文書を作成して、紅卍字会の重要性を訴えている点にも注目すべきである。内田は滿洲事変が勃発すると、一九三一年一月五日に「滿蒙対策緊急意見書」という手書きの冊子を作成して関係者に配布した。そこでは、「この際我が官憲は紅卍字会を庇護して更に会員中の有力者をして將に独立せんとする滿洲政府部内に勢力を占めしむる上に意を用ふれば、独り日滿親善の効果を挙げ得らるのみならず、延いては支那全土の人心を収攬して排日派に対立するに足るべき親日の大勢力を出現せしむることも至難でない」と提言されている<sup>⑨</sup>。

さらに内田は、滿洲事変の真つ最中に『滿蒙の独立と世界紅卍字会の活動』という本を著して、日本の当局者に提供した<sup>⑩</sup>。本書の中で、内田は滿蒙独立國家の建設を力説した上で（六〇頁）、「今回の滿蒙独立国建設運動に対し、世界紅卍字有志者間に、強大なる同情と積極的協力支援の一契機が潜在している」（九二頁）とし、「真に世界紅卍字会こそ滿蒙独立国建設の最良の精神的基礎であり、滿蒙樂土の建設を通して日支蒙民族の提携親善と共存共栄の精神的楔びとなるべきものである」（一〇二頁）と訴えた。

また内田は、道院・紅卍字会の活動が活発である理由として、「其の会員信徒中に政界、軍閥、思想界の巨頭がいるのみでなく、中国財界並に実業界の巨頭及び富豪総じて富裕階級に属する多数信徒を抱擁している

点にある事、並に一般大多数信徒の奉仕的寄附があるので、財政的に可成り活動の余裕が与えられている（九〇～一頁）点をあげている。そして、特に満蒙内においてその会員数は五百万を下らず、「道院・紅卍字会」真に偉大なる満蒙の精神的一王国として、各地諸在の政治家、軍人、実業家、学者等全階級に互る有力知名士を信徒員として網羅している」とし、「満蒙北支主要各地所在の役員氏名」を列挙している（九三～八頁）。

また、本書において特に注目すべきなのは、王仁三郎の活動を絶賛している点である。これに関して、「大本教の教旨は〔…〕中華民國の道院の教義と完全に一致し、今日に於ては、両者全く渾然融合、同一の信仰と実践的活動の用途を辿ど」つていているとし、特に王仁三郎について、「支那道院並に紅卍字会の聖者として、宛ら、神の如き崇敬と信仰をうけている」と述べている（一〇八頁）。そして、満洲事変の勃発後、中国の紅卍字会会員たちが「満蒙自治独立自由王国建設のために熱烈なる運動に着手した」と述べながら、「紅卍字会日本総会理事たる出口日出磨氏は、奉天に使ひせしめられ、同地の卍会と協力して皇軍の慰問、罹災日華民の賑恤運動に、我が赤十字以上の活動振りを示している」（一二四頁）として、王仁三郎の代わりに満洲へ派遣された日出磨の活躍について報じている。

しかしながら、ここで注意しておかなければならないのは、道院・紅卍字会との提携関係を利用した大本教の救援活動は、満洲国の独立運動を背後から支援する目的で行われたという点である。実際、大本教では関連諸団体をあげて満洲国独立に対する支援活動を行い、全国各地で「満蒙博覧会」を開催するなど、満洲の独立を国民世論に訴えかけた。また満洲事変の最中に王仁三郎自身が、関東軍司令部本庄繁大將に宛てて「信者一同皇軍の武運長久を祈願」する内容の電報と感謝慰問状を送っている。

る。

また、内田も人類愛善会の主催のもとに「満蒙問題と日本人の使命」と題する講演活動を行うなどして王仁三郎の活動に全面協力した。このように内田は道院・紅卍字会の活動に関する広報を盛んに行ったが、それは必ずしも道院・紅卍字会の教義に賛同したからではなかった。内田自身、「万世一人格なりといふ思想を支那に教へてやるのが現在日本人の義務である。之れを実現せしむるやうに図らしめねばならぬ。而して之れを拡充して全亜細亜民族を救ふべきである」というように、内田の思想的核はあくまでも皇道の宣揚にあつたのである。

## 五、大本教の朝鮮進出と内田良平

### （一）「アジア連盟」構想と大本教の朝鮮進出

王仁三郎による大本教の宗教進出は、中国だけではなく朝鮮でも展開された。朝鮮の新聞紙上でも、一九二一年の第一次大本事件、一九二三年の道院・紅卍字会との提携、一九二四年の王仁三郎の「入蒙」、一九二四年頃から行われた普天教との提携、一九三四年の昭和神聖会創設、一九三五年に起こった第二次大本事件など、大本教に関する多数の記事が紹介されている。

例えば、第一次大本事件が起こった際には、『朝鮮日報』一九二一年五月二一日付の記事で、朝鮮内に大本教の信者が四千名ほど存在し、退職した警官や軍人が熱心に信仰している様子が報じられた。同じく『朝鮮日報』一九二三年一月八日付の社説では、大本教と紅卍字会との提携を取り上げ、「彼らの所為が朝鮮の多数の怪教を刺激し」朝鮮の所謂甲教乙宗の模糊なる宗教的結社中に此の形式を模倣しその害毒を同胞の精

神に及ぼすことが懸念される」として、大本教と朝鮮新宗教との提携が宗教界に多くの弊害を及ぼす可能性があることを指摘している。この時期、大本教は中国の道院・紅卍字会との間で提携関係をもった後、朝鮮の普天教との提携を急速に進めており、このような動向を念頭において書かれたものであったと考えられる。

先に述べたように、大本教の対外進出の大きな特色は、海外で活動している他宗教（特に新宗教）教団と提携関係を結びながら宣教活動を展開していく点にあった。王仁三郎は朝鮮への進出に際しても、新宗教教団との提携を積極的に行った。これに関して、王仁三郎は一九一〇年代に朝鮮の侍天教と提携をしている点が注目される。『靈界物語』特別編「入蒙記」には、「自分も一度侍天教の教主宋秉峻伯と大正六（一九一七）年の夏提携して以来、会うてゐないから、機会を得たら一度会うて今後の宗教的活動方法につき懇々と相談して見たいと、かねて思つてゐた矢先、朝鮮普天教と提携出来た〔…〕と記されている。」<sup>⑩</sup>

宋秉峻は一進会の前身である維新会の創設者であり、一九〇五年に維新会と進歩会が合同して一進会が設立された後も、会長である李容九と共に一進会の代表として同会を主導した。侍天教は一進会の宗教母体となった東学系の新宗教であり、一九一〇年の韓国併合によって一進会が強制解散させられた後も、宗教団体として活動を継続した。また侍天教は、天佑侠や黒龍会の活動で内田の同志となった曹洞宗僧侶の武田範之が顧問をつとめた。このことからわかるとおり、侍天教は日本との関わりが深い教団であった。なお、宋秉峻は内田と連携して日韓合邦運動を推進し、その功績が認められて韓国併合後に子爵の爵位を授与され、朝鮮総督府の諮問機関である中枢院の顧問に任命されている。

大本教の資料によると、一九二四年に宋秉峻が死去した際、「数年前参綾し、綾部上野に別荘まで建てられた侍天教教主宋秉峻伯は三十日京城

に於て逝去された。〔…〕瑞月先生〔王仁三郎を指す。引用者〕に喪を報じ来り、先生は直に弔電を發せられた」という記録が残されている。このことから、宋秉峻が大本教本部のある綾部に別荘を建てていたことがうかがえる。その他にも、宋秉峻の孫である宋在英が熱心に大本教を信仰したという記録も残されている。<sup>⑪</sup>

しかし、侍天教との提携に関しては、このような断片的な記録しか残されていない。一九一〇年代の朝鮮では武断統治が行われており、朝鮮人による政治・言論活動が著しく制限・抑圧されていた。このような状況において朝鮮の新宗教との交流は事実上、困難であった。侍天教との提携は、王仁三郎と宋秉峻との間で口約束だけが交わされたものと推測される。しかし、両教団の提携関係は、内田による本格的な介入を通じて、一九三〇年代に実現されることになるのである（これに関しては後で詳述する）。

さらに大本教は、一九二〇年代に新宗教教団として朝鮮内で大きな勢力を有していた普天教と提携関係を持った。両教団の関係は、一九二四年九月に普天教の幹部である金勝政が大本教本部を訪問して王仁三郎と会見したことから始まった。ちょうどこの頃、王仁三郎は道院・紅卍字会との提携を進めており、それと同時に並行して普天教との交流が進められたのである。<sup>⑫</sup>

その後、大本教の朝鮮宗教界への進出は一九三〇年代に入ってから本格化していった。その際、朝鮮における大本教の布教活動は、朝鮮の宗事情に精通していた内田良平の先導で行われた点に注目すべきである。そしてまた、大本教の朝鮮進出は、王仁三郎と内田の両者が共通に抱いていた「アジア連盟」の創設というヴィジョンのもとに行われた。

滿洲事変によって滿洲国が建国されると、翌一九三三年二月の国際連盟総会において、日本軍の撤退と滿洲に対する中国の主権承認を内容と

する勧告案が四二対一（棄権二）の大差で可決された。これを不服とした日本政府は翌月に国際連盟から脱退した。これにより「世界の孤児」となった日本は、国際連盟に代わる新たな国際的連合機関が必要となった。その際、欧米列強を中心に結成された国際連盟に対して、アジア諸国を主体とするアジア人による国際連帯組織を結成することで、日本の孤立化を避けようとした。こうして一九三〇年代の日本では、全亜細亞協會、全亜細亞連盟、大亜細亞建設社、大亜細亞協會、新亜細亞協會、大亜細亞青年同盟、東方文化聯盟、アジア義勇軍、東亜民族同盟会、興亜青年聯盟、亜細亞婦人聯盟など、アジア人同士の連帯を叫ぶ数多くの団体が組織された<sup>⑩</sup>。

大本教でも、このような時代風潮に便乗しながら「アジア連盟」の必要性を盛んに訴えた。満洲事変の勃発によって国際連盟との間に軋轢が生じると、『人類愛善新聞』では、「今回の国際連盟の如きは、我皇典に示さるる、八岐の大蛇が櫛稲田姫を呑むの古事に相当するもので、断じて悪魔の偽善的行為なることが明示されてゐる。〔…〕日本は〔…〕天孫民族本来の使命に基いて、神功皇后の史実を拡大し、二度目のシラキ（白人）征伐を断行するの外はない」というように、国際連盟に対する対決姿勢を明確に打ち出した。そして満洲国が建国されると、「国際連盟が満洲問題に対して認識不足を完全に暴露した今日『アジアの問題はアジアで解決せよ！』の声が澎湃として起つて来た」とし、「古の亜細亞の本来に帰す事を以て亜細亞聯盟としたい。それには先づ白色人種の勢力外に出なければならぬ<sup>⑪</sup>」として、白人の排斥を前提とした「アジア連盟」の結成を訴えた。

また、昭和青年会の機関誌『昭和』でも、陸軍中将佐藤清勝によって、「日支紛争事件は、実は日本対欧米の紛争であり、この紛争は黄人対白人、亜細亞対欧米の闘争に導く第一歩と見て差支ない。〔…〕今や我国は

世界的孤立状態にある。然し乍ら、これは名誉あり意義ある孤立である。すべて国家が隆昌なる時に於ては、他国の嫉視と圧迫を蒙ることは当然である。茲に孤立と名誉の意義がある」と訴える記事が掲載された。

さらに『昭和』昭和八年一月号では、「亜細亞連盟結成への提議」と題する特集が組まれた。ここでは、陸軍中将の四天王延孝が「皇道の日本と王道の満洲が一つになって之の徳を四辺に及ぼす事である。かくすれば亜細亞聯盟は結成される」と訴え、東洋研究会主幹の中平亮も「欧州から東洋を解放せしめ〔…〕アジアのブロックを主唱する〔…〕アジア聯盟を結成せしめたい」と訴えた。

しかし、このような「アジア連盟」論も、「〔その〕中心になる力は何処か〔…〕これは云ふ迄もなく日本である〔…〕元来亜細亞は日本があつての亜細亞であつて〔…〕日本の嚴とした存在の爲めに、今日迄亜細亞は辛ふじて白人に犯されずに済んだのだ。〔…〕亜細亞民族の大同団結は、日本が其の指導者となり、盟主とならねばならぬ<sup>⑫</sup>」というように、日本がアジアの盟主となるべきことを当然視するものであつた。そしてまた、「亜細亞を真に精神的に連繫し統一するものは皇道でなくてはならぬ<sup>⑬</sup>」、「日本固有の皇道の大本義に準繩して〔…〕亜細亞人の爲の大亜細亞主義に達しなければならぬ<sup>⑭</sup>」というように、皇道によるアジア統一という日本流の「大アジア主義」を実現しようとするものであつた。

このように日本を中心とする「アジア連盟」の結成が叫ばれているのと同じ時期に、大本教は朝鮮への進出を試みた。その目的は、「アジア連盟」を創設するための土台として、新しく建国された満洲国と日本（内地）と植民地朝鮮との連結をより強固なものとするためであつた。

先に述べたように、大本教は道院・紅卍字会との提携によって満洲国内で確固たる宣教基盤を獲得し、人類愛善会の運動を通じて「日滿一体」となるための運動を展開していた。このような人類愛善運動に朝鮮人が

加われば、宗教的な次元で「日・満・鮮」を一体化することができ、「アジア連盟」を結成するための土台を形成することが可能となる。こうして大本教は、満洲国が建国され日本が国際連盟を脱退したのと同時期に、朝鮮への本格的な進出を試みようとしたのである。

その際、内田良平が大本教の先導役を果たした。中国における大本教の宗教進出が、王仁三郎が構築した道院・紅卍字会との提携関係を内田が後方で支援するものであったとするなら、朝鮮における大本教の進出は、内田が築き上げた人脈や組織を王仁三郎が継承する形で行われたのである。

## (二) 日韓合邦記念塔の建設と昭和神聖会の支援

内田良平も「アジア連盟」の結成を盛んに訴えた。ただし内田の場合、満洲事変が起こる以前から、日本を盟主とする「アジア連盟」の結成を構想していた。内田が最初に朝鮮へ乗り込んでいったのも、「アジア連盟」を形成するための最初の段階が「日韓合邦」であると考えたからである。これに関しては、黒龍会の機関紙である『亜細亜時論』一九二一年四月に掲載された記事の中で、「日韓併合は実に亜細亜連盟の前提〔であり…〕日本人も朝鮮人も〔…〕亜細亜諸邦の諸民族に、提携結合の模範を示し、以て亜細亜連盟組成の目的を達せねばならぬ」と述べられている。しかし、ここでいう「アジア連盟」とは、「日本は朝鮮を併合すると共に、其の目標を東洋平和の維持者より更に一步を進めて、亜細亜連盟の盟主となさねばならなかった」というように、日本盟主論を前提にしたものであった。

このように早くから「アジア連盟」の結成を目指していた内田は、満洲国の承認をめぐって日本が国際連盟から脱退した頃になると、大本教の皇道宣揚運動に合流しながら「アジア連盟」の実現をより切実に訴え

ていった。その際、内田は過去に推進した日韓合邦運動を「アジア連盟」を結成するための準備段階と位置づける発言を積極的に行った。例えば、『昭和』誌上に掲載された記事の中で、内田は一進会会長の李容九や宋秉峻と手を組んだことについて、「〔李容九と宋秉峻と内田の三人で〕日韓聯邦を作り〔…〕日韓支の聯邦を形成し日本の天皇を聯邦の陛下とし茲に大アジア聯邦を造るにあつたのである。現在満洲国家の誕生を迎へたのであるが〔…〕アジア聯盟の成立は世界聯邦の一段階であつて、遂に世界聯邦に至るべきよきお手本であると信ずる」と述べている。

その他にも、内田が韓国併合時の思い出について語った記事がある。そこでは一進会の目的について、「日韓合併、満蒙開拓といふことがあつたが、要するに、日本と一つになって、満洲や蒙古を手に入れ、更に進んで支那を語らつて、現在の言葉でいふ亜細亜聯盟を作らうとした」と述べており、そのためには「日韓両国の合邦が第一急務で、之が出来上がった処で一進会百万の会員を満洲に送つて、満蒙の開拓をさせて独立運動を起こ」そうとしたが、日本政府当局者によって一進会が解散されてしまい、「亜細亜聯盟もオジャンになった」と述べている。

このように昭和青年会の機関誌である『昭和』に、内田が「韓国併合」を「アジア連盟」結成の準備段階とみなす記事を掲載したのは、内田の人脈や活動基盤を使って大本教が朝鮮宗教界へ進出することを背景としたものであった。その際の内田の有する人脈と活動基盤とは、まさに元一進会員たちのネットワークに他ならなかった。

このことを示す象徴的な出来事として、玄洋社・黒龍会が中心となつて行つた「日韓合邦記念塔」の建設をあげることができる。この記念塔は、内田良平・頭山満・杉山茂丸らが発起人となり、日韓合邦二十五周年を記念する「内鮮融和」の「永世不忘塔」として、明治神宮表参道に建設されたものであった。この記念塔の石室には「日韓合邦功労者」の

名前を刻んだ銅板が奉安された。そこには韓国併合に尽力した伊藤博文や寺内正毅などの日本人功労者の他に、一進会会長李容九や伯爵宋秉畷をはじめとする「一進会幹部」と、「一進会道会長及び評議員其他役員」の名前が三頁にわたって列挙され、最後に「外、「一進会」会員壹百万人」と記されている。

また、この記念塔の竣工奉告式典が一九三四年一月二五日に挙行された。その式典には、「主賓（功労者及遺族）」として多数の著名人が招待されたが、その中に朝鮮人として、一進会会長李容九の遺族である李顕奎と李碩奎、また一進会評議長俞鶴柱の遺族である俞駒が招かれた。そして祝辞演説の際には、「侍天教会一同代表」として李顕奎と、「合邦賛成有志代表」として侍天教徒の李海天が祝辞を述べている。

その他にも、注目すべきことがある。昭和神聖会がこの記念塔の建設に全面的に協力している点である。これに関しては、同年七月に昭和神聖会が結成された直後に、この記念塔の竣工式典が行われている点が注目される。また、この式典には多くの著名人が来賓として招待されたが、その中に昭和神聖会の副統管である出口宇知磨が参席したほか、王仁三郎も昭和神聖会統管の名義で「日韓合邦の事は、最も光輝ある聖代の祥事、曠古の大業と謂ふべし。〔…〕皇国世界経綸の第一歩たる日韓合邦の偉業を永へに伝ふる記念塔竣成に際し、些か微意を披瀝して祝辞となす」という祝辞を寄せている。

また、記念塔の工事に際しては昭和神聖会の神祇部が地鎮祭を執行し、竣工除幕式典も神聖会の祭員たちによって執り行われた。大本教の機関紙である『人類愛善新聞』でも、この記念塔について「明治天皇の御鴻業たる日韓合邦を讃仰記念し、併せて当時の志士功労者の業績を不朽に伝へんとする」ために建設されたとして大々的に報じている。このように、日韓合邦記念塔の建設は、王仁三郎の主管する昭和神聖会の

全面的な後援のもとに行われた。

先に述べたように、内田の目標は朝鮮を日本と合併させ、さらに中国本土から滿蒙地域を分離・独立させた後、中国を懐柔して「アジア連盟」を創設し、西洋列強に対抗しながら日本の世界制覇を図ろうとするものであった。韓国併合に次いで、滿洲国の独立という形で長年の宿願が成就すると、内田は次の目標である中国本土への進出と「アジア連盟」の形成に向けて、植民地朝鮮と滿洲国の連結をより強固なものにしようとした。滿洲国独立の直後、しかも国際連盟から脱退して「アジア連盟」の結成が叫ばれていた真つ最中に、頭山や内田らがわざわざ「日韓合邦」を記念するモニュメントを建造したのも、まさにそのような理由によるものである。

日韓合邦記念塔の建立に際して、内田自身「内鮮融和の力は延びて滿洲独立記念塔」と高らかに謳っているが、ここには朝鮮支配の延長線上に滿洲支配を定置しようとした内田の真意が端的に示されている。そしてまた、このような日本（内地）・朝鮮・滿洲国による連結強化は、「内鮮融和せずして滿人の悦服なく、滿鮮人の悦服なくして亜細亞諸民族の宗主国となり、皇道を世界に布く事は出来ない」というように、「内鮮融和」の力を滿洲国に及ぼし、「日本を宗主国とする亜細亞聯邦組織の実現を期す」ことを目標とした、皇道による日本のアジア統一を目指すためのものであった。そして、このような皇道宣布のために、一九三四年一月に人類愛善会朝鮮本部が設立されたのである。以下では、その経緯について詳しく考察してみることしよう。

## 六、人類愛善会朝鮮本部の設立

## (一) 侍天教と人類愛善会朝鮮本部

大本教は海外で宣教活動を行う際に、外郭団体である人類愛善会の活動を通じて行うのが常であった。朝鮮においてもその方式が採用された。一九三四年一月一日に人類愛善会の朝鮮本部が結成され、日本の総本部から出口日出磨総裁補を迎え、京城公会堂で盛大な発会式が挙行された。先に述べたように、日韓合邦記念塔の竣工式が一九三四年一月二五日に行われており、そのわずかその一ヶ月後のことであった点に注目すべきであろう。

また、大本教の資料によると、同会には「上帝教…一六五六人、侍天教…一〇四九人、儒教…三〇三人、天理教…一三九人、キリスト教…八九人、仏教…七四人、檀君教…六七人、朝鮮耶穌教…五九人、天道教…一二人、大聖教…六人、天主教〔カトリック〕…二人、水雲教…一人、その他…二二六三人、合計五七二〇人」が集まって結成されたとされている。ここで注目したいのは、これらの宗教教団のうち、上帝教と侍天教からそれぞれ千人以上の会員が入会しており、その数を合わせると二七〇五人となり、実に全体の約半分を占めていることである。

また『人類愛善新聞』の記事によると、人類愛善会朝鮮本部発会に携わった主力メンバーとして以下の名前があげられている。

李海天、柳志薫（侍天教大道師）、朴海黙（侍天教道師）、金永杰（侍天教道師）、李顕奎（侍天教道師）、史鉉必（侍天教幹部）、李承元（侍天教前幹部）、申東勳（侍天教前幹部）、李在元、金仁泰（上帝教幹部）、全斗煥（上帝教幹部）、沈昌策（上帝教幹部）、劉相和（上帝教幹部）、鄭昌信（上帝教

幹部）、李源淳（上帝教幹部）、元容駟（上帝教幹部道主）、鄭薫模（檀君教々主）、李寅相（檀君教幹部）、李相天（檀君教幹部）、金熙昶（耶穌教牧師）、朴寅圭（専修学校教師）、李慶烈（鉞業家）、李承年（鉞業家）、李義善（実業家、町長）、許漢国（実業家）、嚴尚燮（記者）。

この記事から、主に侍天教と上帝教と檀君教の幹部が人類愛善会朝鮮本部の設立に尽力したことがわかる。檀君教についてはまた後で考察することにして、以下では侍天教と上帝教について説明しておきたい。

侍天教も上帝教も、一八六〇年に崔濟愚（号は水雲）が創始した東学から分派した教団である。東学の本流は天道教と教名を改称したが、その天道教から分派したのが侍天教であり、さらに侍天教から分派したのが上帝教であった。天道教と侍天教と上帝教の創設経緯を説明すると次のとおりである。

東学の創始者である崔濟愚が一八六三年に邪教の罪で処刑されると、弟子の崔時亨（号は海月）が第二代教主となった。崔時亨には孫秉熙・孫天民・金演局という三大弟子がいた。一九〇四年に李容九と宋秉峻によって一進会が組織され、親日活动を展開するようになると、孫秉熙は一九〇五年に東学を天道教として宗教教団化し、一進会の会員を教団から追放した。一方、一進会の会長である李容九は、これに対抗するため侍天教を創設した。こうして東学の勢力は、反日派（反一進会）の天道教と親日派（一進会）の侍天教とに分立した。

孫秉熙は一九〇七年に金演局を天道教の玄機司長に任命して教主の座から退いたが、その翌年（一九〇八年）に金演局は李容九に招かれて侍天教に移り、大礼師という地位についた。一方、天道教側は新たに朴寅浩が大道主に就任し、東学の教統を継いで第四代教主となった。

一九一〇年の韓国併合によって一進会は強制解散させられたが、侍天



教は宗教教団として存続した。しかし、一九一二年に李容九が死去すると、教団の実権を掌握していた宋秉峻と教団の代表であった金演局の間に意見対立が生じた。金演局は一九一三年に済世教という看板を掲げて侍天教から離れ、宋秉峻は大主教として侍天教の教主となった。先に述べたとおり、一九一〇年代に王仁三郎は宋秉峻を通じて侍天教と提携したとされるが、それはこの頃のことであったと考えられる。

その後、宋秉峻は一九二〇年に侍天教の大主教の座を辞任し、朴衡采が道師代表となって大幅な組織改編を行い、多くの信徒を獲得していった。一方、金演局の方は、一九二七年に教団本部を忠清南道の鷄籠山〔讖緯書『鄭鑑録』で新王朝の首都になると予言された山〕に移転して、教名を上帝教とした。このように上帝教は、もとは侍天教から分派した教団であった。このような事実から、人類愛善会朝鮮本部が侍天教（元一進会）と関係する宗教教団のネットワークを中心に結成されたことがわかる。

このことは他の資料を通じても確認することができる。人類愛善会朝鮮本部の設立経緯については、『人類愛善新聞』に関連記事が掲載されている。それによると、日韓合邦に尽力した朝鮮の李海天が、内田良平を通じて「皇道大本および人類愛善会を知るに及んで、惟神の大道と愛善の大義によって初めて真の日韓合邦心の融和が期し得らるべきこと」を悟り、自ら有識者を説得して会員の獲得につとめ、各宗教に参加を呼びかけたものであるとされている。

ここに記されている李海天は、かつて日本の密偵として働いたことがあり、一九三八・九年頃にも関東軍参謀本部の命を受けて対ソ工作を行った人物である。彼はもと一進会の会員として侍天教の信者であり、内田とは昵懇の仲であった。また、李海天は「日韓合邦記念塔」の竣工除幕式典に参加し、「合邦賛成有志代表」として祝辞を述べている。同式

典には、先に述べたように、李顕奎（元一進会会長・李容九の長男）と兪駟（一進会評議長・兪鶴柱の嗣子）も「主賓」として参席した。

その際注目すべきなのは、李海天と李顕奎が人類愛善会東京事務所を訪問して、人類愛善会朝鮮本部の設立に関する種々の打合せをしている点である。日韓合邦記念塔の計画に着手したのは一九三四年三月であり、竣工除幕式が同年一月二五日、そして人類愛善会朝鮮本部の結成式が同年二月一六日に行われており、この期間の短さから考えて、日韓合邦記念塔の建設と人類愛善会朝鮮本部の結成は互いに関連しておこなわれたことがうかがえる。その目的は、侍天教（元一進会）の信徒を日韓合邦記念塔の建設によって慰撫・懐柔し、人類愛善会朝鮮本部へ大挙入会させることであったと考えられる。

そして、この工作の中心人物となったのが侍天教徒の李海天と李顕奎（李容九の長男）であった。彼らは内田の期待通りに、朝鮮の宗教家を人類愛善会の運動に賛同させるべく尽力した。例えば、李海天は人類愛善会朝鮮本部の発会式典の中で、「愛善の大精神に依って日鮮両民族が堅く心の融和をあげねば、日韓合邦の真の意義、真の理想は実現されない〔…〕この精神、この大義をかざして次いで日満真の融合を遂げることは難事ではなく、更にこれを東亜全体に及ぼしつひに全世界に拡充して人類の幸福を招来せんことが吾人の使命である」と訴えた。

また、李顕奎は、「侍天教は」日韓合邦とは切っても切れぬ深い関係があるのです。その侍天教の教義が皇道大本のそれと酷似してあるといふより寧ろ一致してある。そこで率先して愛善会と合同することを画したものであります。今後は愛善の二字によって強靱な連鎖を結び、心の兄弟となって人類の為に尽し度いと念願してゐます」と述べている。

そしてまた、侍天教（元一進会）以外にも、人類愛善会朝鮮本部の結成に大きな役割を果たしたグループがある。内田は「内鮮融和」を目的と

する団体として一九二一年に同光会を結成したが、それに所属した元メンバーたちも人類愛善会朝鮮本部の設立に積極的に関わった。そのなかでも特に李喜侃は、大本教との提携に意欲をみせた。

李喜侃は旧韓末の一九〇八年二月から一九〇九年三月まで内部の警務局で密偵をつとめた。この頃、ちょうど内田は韓国統監府の嘱託となっていたので、この時期に李喜侃と面識をもったのではないかと考えられる。内田は一九二一年二月に同光会を東京に設立し、同年五月に朝鮮支部を結成したが、その時、李喜侃が朝鮮支部の幹事長をつとめた。同光会の代表として檀君教の鄭薫模らが日本の議会に「朝鮮内政独立請願書」を提出したのも、李喜侃の斡旋によるとされる。

そして人類愛善会朝鮮本部の設立に際しても、李喜侃は内田からの指示を受けて、朝鮮人を同会に入会させるように画策したと考えられる。これに関しては、釜山で発行されていた日本語新聞の『釜山日報』に、次のような注目すべき記事が掲載されている。

〔見出し〕綾部の大本教が朝鮮開拓に乗出して来た。〔…〕大本教の別働機関で活躍してゐる人類愛善会の内命を帯びてかつて同光会のメンバーであった李喜侃氏が〔…〕十万の教徒を擁して隠然たる勢力を持つ侍天教に対し内部工作を開始した。〔…〕目下侍天教の姉妹団体に盛んに手を伸ばして分解作用を起すべく働きかけてゐる模様でこれは大本教が侍天教を足場にして朝鮮布教に積極的乗出しを開始したものと見られ永年の沈黙を破つて起ち上らんとする半島宗教界に一つの波紋を投げかけんとしてゐる。<sup>⑤</sup>

この記事は、人類愛善会朝鮮本部の発会式に参加するために、船で釜山に上陸した大本教一行の動向を直接取材して書かれたものである。

で、かなり信憑性の高い記事であると思われる。この記事の中で、「同光会のメンバーであった李喜侃が侍天教に対し内部工作を開始した」とはつきり記されている点に注目すべきであろう。

ちなみに、大本教の資料をみると、李喜侃は朝鮮の予言書である『鄭鑑録』の中の出でくる「真人出於海島中〔真人は海の島の中から出現する〕」という文句を、王仁三郎が真人として到来する意味に解釈し、大本教の運動と連繫したいという旨の書簡を内田に送ったという記事が残されている<sup>⑥</sup>。果たして、李喜侃が王仁三郎を本当に真人とみなしていたのか、あるいは朝鮮人に王仁三郎のことを知らしめる際の良き宣伝材料になると判断したのかは定かでないが、いずれにせよ、李喜侃が「出口王仁三郎＝鄭鑑録の真人」説の発信源であったことは注目しておいてよいだろう。

## (二) 大本教の檀君教への接近

先に述べたように、人類愛善会朝鮮本部の設立に際して、檀君教から教主の鄭薫模をはじめ多数の信徒が入会した。同会へ入会した檀君教徒は六七名であり、入会者全体に占める割合はそれほど高くないが、それは檀君教自体が信徒数の少ない小規模教団であったからである。前述した一九三四（昭和九）年二月一三日付の『人類愛善新聞』の記事をみると、同会の設立に尽力した人士として、侍天教（七名）、上帝教（七名）、檀君教（三名）<sup>⑦</sup>があげられており、侍天教や上帝教に次いで、檀君教が人類愛善会の創設に積極的に関与した教団であったことがわかる。

これに関して、檀君教教主の鄭薫模は、一九三四年一月一日に行われた同会の発会式において、「人類愛善会朝鮮本部の発会は人類史的意義よりして実に画時代的なり。東洋の平和も世界の平和も宗教的略線、民族的限界を超越したる愛善精神の実践に依りてのみ其実現を期し得ら

る」と賛辞を述べている。このように檀君教は、教主の鄭薫模を筆頭として人類愛善会の活動に協力的な姿勢をみせた。

その理由は、李海天が檀君教の信徒であったことによると思われる。李海天は侍天教の信徒であると同時に、檀君教の大宣師をつとめた檀君教の幹部でもあった。李海天がいつどのようにして檀君教に入信したのかについて詳しいことはわからないが、檀君教は一九二一年に内田が組織した同光会の運動に深く関わっており、この時、侍天教（元一進会）と檀君教との間に交流が行われたものと推測される。

なお、李海天に関して、大本教の記録によると、人類愛善会の朝鮮本部は京城府敦義洞にある李海天の自宅内に置かれ、事務所に神殿をつくって、中央に大本皇大神を奉斎し、左右に檀君と東学党の崔濟愚の写真を祀り、そのそばに純大本式によって李家の祖霊が祀られたとされている。このように人類愛善会朝鮮本部の神殿内に、大本教の祭神と共に檀君と崔濟愚が合祀されたのは、李海天が檀君教と侍天教双方の信者であったからであると考えられる。

一方、大本教の側でも、檀君教には特別な関心を寄せた。興味深いことに、大本教が檀君教に関心を寄せたのは、政治的な働きかけというよりは、教理上の理由からであった。これに関しては、王仁三郎が次のような歴史観を持っていたことに注目する必要がある。

神典に云ふ葦原の国とは、スエズ運河以東の亜細亜大陸を云ふのである。ゆゑに其神典の意味から云ひ、また太古の歴史から云へば日本国である。三韓のことを『根の堅洲国』とも云ふ。新羅、高麗、百済、ミマナ等のことであるが、これには今の蒙古あたりは全部包含されて居たのである。また出雲の国に出雲朝廷と云ふものがあつて、凡てを統治されて居つたのである。一体この亜細亜すなはち葦原は

大本教の皇道宣揚運動と人類愛善会朝鮮本部の設立

伊邪那美命様が領有されて居たのであつて、黄泉国と云ふのは、印度、支那、トルキスタン、太平洋の『ム』国等の全部を総称して居た。それが、伊邪那美命様が、かくれたまふたのち素盞鳴尊様が継承されたのであつて、その後は亜細亜は素盞鳴尊様の知し召し玉ふ国となつたのである。〔…〕それで、素盞鳴尊様の御神業は亜細亜の大陸にある。

これは王仁三郎が大本教の信徒に語った話を記録したもので、「亜細亜大陸と素尊の御職掌」という題がつけられている。この特異な歴史観によると、記紀神話に出てくる「葦原の国」とは「アジア大陸」のことを指し、伊邪那美尊がこれを領有した後、素盞鳴尊が継承したのであり、従つて、アジア大陸は太古において日本の領土であつたというのである。

このように王仁三郎は、素盞鳴尊をアジア大陸の経営に関わつた神として特別に重要視した。そして戦前の日本では、素盞鳴尊を檀君と同じ存在であるとみなす説（以下、これを「檀君即素盞鳴尊」説とする）が流行しており、大本教でもその説が信じられていた。この「檀君即素盞鳴尊」説は、一九二〇年代半ば頃から朝鮮で急速に拡散していったものである。このことについて、少し説明をしておこう。

朝鮮に官幣大社として朝鮮神宮が創建されることになつた際、朝鮮神宮の祭神をめぐる、一九二五年春頃から朝鮮総督府と神道関係者の間で意見の衝突が起こつた。結局、朝鮮神宮の祭神は天照大神と明治天皇とすることが正式に決定されたが、これに対して朝鮮の有識者らが猛烈に反対した。そのために、日本の神道界では一部の者が、内鮮融和の目的から朝鮮の国魂神として檀君を祭神として祀ることを主張した。この問題に関して、檀君祭神論を主張した小笠原省三は次のように述べている。

内鮮両民族は神道的結合に依って、其の民族的使命である東洋の永遠の平和を確保するに至るであらう。〔…〕朝鮮と出雲及び九州地方とは、今日より以上に密接なる交通があったのだ。殊にわが素佐之男命及び其の御一族は鮮地に往来し貿易し、鮮地は素神の統治下にあった事も明瞭である。今の江原道牛頭山は実に素佐之男命の離宮であったのである。〔…〕即ち両者は仏教渡来以前に於いては、互に其の信仰を同じうしたものである。其の信仰とは、祖先崇拜教即ち神道であったのだ。〔…〕わが出雲地方の主権者であった素佐之男命は、朝鮮創成の神と云はるる檀君であると伝へらるる事を見ても、神代に於ける鮮地の大部分は出雲系統の支配下に在り、多く出雲文化の恩沢を蒙つてゐたものであらう。

ここに述べられているように、小笠原は、神道の本質が各国の土着神を奉斎することによって「敬神崇祖」祖先崇拜の念を持たせる点にあると考え、朝鮮の始祖神とされている檀君を朝鮮神宮の祭神とすることを主張したのである。しかしながら、そのような主張も「檀君即素盞鳴尊」説を根拠として、出雲地方の主権者である素盞鳴尊が朝鮮の地を支配統治していたという歴史観を正当化し、朝鮮人の同化政策を押し進めようとするものであった点に留意する必要があるであらう。

そして大本教でも、内鮮融和を促進させる歴史説として「檀君即素盞鳴尊」説を受け入れながら、朝鮮への宗教進出を行おうとした。これに關して、王仁三郎自身が素盞鳴尊を檀君であると語っているような記録は見当たらないが、大本教の資料をみると「檀君即素盞鳴尊」説について書かれた記事がいくつか存在する。例えば、ちょうど朝鮮神宮祭神論争が起こり「檀君即素盞鳴尊」説が日本の神道界で盛んに喧伝されていた一九二五年に、機関誌『神の国』誌上に「素尊御事蹟曾尸茂梨」と題

した論文が発表されている。<sup>④</sup>ここでは『日本書紀』に掲載された素盞鳴尊伝承の中に出てくる「曾尸茂梨」とは、朝鮮の江原道春川郡新北面牛頭山に所在する「牛頭山」のことであると論じられている。また、一九三一年一月二三日号の『人類愛善新聞』をみると、「素尊〔素盞鳴尊のこと・引用者〕は朝鮮江原南道の長白山の支脈大白山に降臨なされ、鮮民は素尊を檀君と称へ、始祖として崇敬してゐる」という記事が掲載されている。

これと関連して注目すべきは、一九三〇年江原道の春川に人類愛善会春川支部が設置され、同支部の会員たちによって牛頭山の地に供物を捧げ神言奉事することが行われたことである。<sup>⑤</sup>それだけではなく、一九三四年三月頃から春川邑長と人類愛善会春川支部長を兼務する川崎勇や春川道会議員兼春川繁栄会長の山中友太郎らを中心に、牛頭山の聖域に素盞鳴尊の御神霊を奉祀するための神祠を建設する計画がたてられた。<sup>⑥</sup>その際、大本教側は「檀君即素盞鳴尊」説にもとづいて、この神祠を朝鮮の開国始祖である檀君を奉斎するものであると主張しながら、朝鮮人住民側に賛同を促した。<sup>⑦</sup>さらに、一九三四年八月に朝鮮巡教に赴いた際、日出磨は春川邑を圍繞する鳳儀山一帯を探查し、古代の都跡らしい面影を発見して、そこを「檀君神社」建設のための場所として指示している。<sup>⑧</sup>

このように大本教は、素盞鳴尊と同一神と考えられていた檀君の存在に注目し、朝鮮の新宗教教団の中でも檀君教に大きな関心を寄せた。<sup>⑨</sup>そして、一九三四年一月二〇日に「朝鮮にては国祖神としての檀君崇拝の思想を勃興せしむることは急務中の急務」であるとして、大本教から京城郊外の始興にある檀君教本部へ約三〇名の大本信徒が訪問し、正式参拝を行った。<sup>⑩</sup>しかし、このような檀君教への関心は、「檀君の深き

歴史的因縁を理解することが内鮮一体の実を挙ぐる契機である」と述べられて、<sup>⑧</sup>「檀君即素盞鳴尊」説にもとづいて、「内鮮一体」運動を推進しようとするものであった点に留意する必要があるであろう。

### 七、植民地朝鮮で展開された人類愛善運動の特質

朝鮮における大本教の宣教活動はすでに一九二〇年代から行われていた。当初は朝鮮に居住していた日本人への布教がおもな活動であったが、一九三〇年代に入ると日本で展開された皇道宣揚運動をそのまま植民地朝鮮に延長したような活動が行われるようになっていった。

例えば、大本教は日本で「国体闡明運動」を展開したが、これと連動して朝鮮においても、皇太子殿下御誕生奉祝祭の際に、昭和青年会と坤生会の「両会員を総動員し、両会旗捧持の下に朝鮮神宮に正式参拝」するといった活動が行われた。また、大本教は昭和青年会・坤生会を主体として日本で各種の国防運動を展開したが、朝鮮においても同様の運動が展開された。一例をあげると、一九三四年に「毎年四月五日を国華日と定め、全国民共に皇軍の士気を高揚し且国民精神の涵養に資する為に〔…〕出征者家族、戦死者家族救恤の基金を得る為に全国主要都市に於て国華即ち桜の花を売る事」<sup>⑨</sup>が決定された。この運動は朝鮮においても実行され、一九三四年四月五日の国華日には昭和青年会員の協力のもとに坤生会員の女学生たちが戸別訪問や街頭販売に従事し、平壤支部だけでも六千五百個の桜花章が販売頒布された。<sup>⑩</sup>その他にも、人類愛善新聞の売り上げの一部を「朝鮮軍司令部愛国部に国防費として献金」<sup>⑪</sup>したりもしている。

また当時は、列強各国で戦闘機が開発され、戦争の方式が大きく変化

大本教の皇道宣揚運動と人類愛善会朝鮮本部の設立

し始めていたが、この動きを敏感に察知した大本教では、王仁三郎による「愛善会会員一同空軍の完備に力の限りを尽せ」という掛け声のもとに、昭和青年会に航空部が新設され、「敵の空襲に対し皇大神宮や神宮を護り宮城を守り、更に神州国土を守る事は敬神尊皇愛国の悉くを具現する所以であり、皇道信奉者たるお互の当然の義務」<sup>⑫</sup>であるとして、防空展覧会が全国的に開催された。この防空展では、国民の防空意識を高めるために『挙国制空』『護れ我等の空を』などの冊子が配布されたほか、展覧会場には献金箱が備えられ、寄せられた献金が国防費として献納された。<sup>⑬</sup>これと同様の国防運動が朝鮮でも展開され、昭和青年会の主催による防空映画の上映会や座談会などが朝鮮の各地で開催された。<sup>⑭</sup>

そして、一九三四年一月に人類愛善会朝鮮本部が結成された頃になると、人類愛善運動を通じて皇道の宣揚がますます盛んに行われていった。朝鮮で展開された人類愛善運動の様子については、『人類愛善新聞』を通じて日本の読者にも広報された。例えば、一九三四年一月三日付の『人類愛善新聞』をみると、人類愛善会に入会した朝鮮青年たちが『朝鮮二千万同胞に告ぐ』と題する檄文を発表して「皇道化」を呼びかけ、「内地人はこの大調和の心を大和心と称してゐる。即ちこの大調和線とは皇道であり、人類愛善の大道であるのである。吾々が人類愛善運動に参加したのは、左翼小児病的、機械的、コンミンタン<sup>(ママ)</sup>的諸運動を唯一の社会改造運動の如く誤信してゐる同胞諸君に対してこの大調和線を知らしめ」<sup>⑮</sup>るためであると訴えた記事が掲載されている。

また、一九三五年一月三日付の『人類愛善新聞』をみると、人類愛善会員の鄭啓源がキリスト教の神社参拝拒否問題について論じた記事が掲載されている。そこでは「基督教系学校の神社参拝拒否も実に由々敷き問題で時正に反国体思想撃滅の機運に際し、此等偏頗極まる腐敗し果てた欧米心酔の根性を断滅せねばならない。朝鮮神宮は天照大神、明

治大帝両神位を奉安申上ぐる半島の総守護神であつて〔…〕我等は此際一層皇道宣布の使命に燃え断乎此等醜劣なる反国体的行動を一掃しなくてはならない」と訴えられている。

これらの記事に記されている活動は、日本で展開された皇道宣揚運動を植民地朝鮮においてそのまま実行しようとするものであつたが、それは同時に、朝鮮総督府が推進した施策に合致するものでもあつた。朝鮮では宇垣一成が総督に就任すると（在任期間：一九三二～六年）、「心田開発運動」と称する運動が展開された。この運動は、①国体観念を明徴にすること、②敬神崇祖の思想及び信仰心を涵養すること、③報恩・感謝・自立の精神を養成することを主旨とするものであつた。

これと関連して、一九三四年九月二三日号の『人類愛善新聞』には次のような記事が掲載されている。「慶尚北道会議員文明琦氏は、今度は総督府のいはゆる心田開発の運動と相俟つて精神作興運動に乗出し、朝鮮同胞の家庭に敬神思想を吹き込むべく、神棚奉安及び仏壇安置の実行運動を開始した」。このように報じられているが、朝鮮人に神棚奉安などを行わせようとした文明琦とは、いったいどのような人物であつたのだろうか。ここで彼の経歴について説明しておこう。

文明琦（一八七八～一九六八…文明琦一郎と創氏改名した）は一九三二年頃から鉱山業（金銀採掘）に投資したのが大当たりして、慶尚北道で屈指の大富豪となつた。彼は日本の信任を得るために、一九三四年一月に自分の所有する金鉱を三越財閥に払い下げ、翌年にその代価の中から一〇万円を捧げて陸軍と海軍に飛行機を一機ずつ献納した。彼の飛行機は「文明琦号」と称され、献納式の様子などが新聞を通じて報じられた。彼の行為は次第に熱を帯び、軍用飛行機一〇〇機を献納することを目的とする朝鮮国防飛行機献納会を組織して自ら副会長となつたほか、一九三七年九月には全朝鮮一郡一台献納運動を展開した。その後、献納

行為は戦闘機だけではなく軍艦にまで及び、一九四三年には献艦運動を提唱し、自ら率先して自己の所有する銅鉞三個を寄付した。

文明琦の活動で特に注目したのは、彼が熱心な皇道信奉者であつたことである。彼は一九三七年に『所志一櫛…真の世界平和へ』という日本語で書かれた著書を刊行し、「神国日本を誇る皇道の宣布」（「自序」一頁）を訴えた。その第六章「日本と朝鮮」とでは、「檀君こそ天照皇大神の御弟君素戔嗚尊の御子、五十猛の命であらせられる〔…〕日本神代の伝説に、素戔嗚尊がその御子五十猛の命を伴ひて日本海を渡り、朝鮮の東海岸に上陸し今の江原道春川の附近曾尸茂梨といふところに暫く足を駐せられといふ〔…〕この関係からして朝鮮の開国檀君はつまり素戔嗚尊の御子五十猛であらうと考察されてゐるから、日本と朝鮮の関係は元来いづれも伊弉諾、伊弉冉の二柱の神の後裔の治め給ふた同族同祖とも言へる」（三一～三頁）と述べている。このように「檀君即素戔嗚尊」説を根拠にして「日鮮同祖論」を説き、日本の朝鮮統治が歴史的に正当なものであることを力説した。

そのほかにも、本書では、一九三二年二月上海で起こつた廟行鎮戦闘の際に、日本軍三名が肉弾で突撃して戦死したことをとりあげながら、「今後の戦争は飛行機時代で爆弾三勇士に代るに肉弾飛行士を必要とする。余は血盟の士を得て、いつでも肉弾飛行士として皇軍に殉するだけの覚悟を有してゐる」（七四頁）として、太平洋戦争末期に実行された神風特攻隊を先取りするような覚悟が記されている。また本書の巻末には、一九三五年四月七日京城ラジオ放送局で放送した演説（陸海軍機献納に就いて）を掲載し、朝鮮同胞に朝鮮国防飛行機献納会への献金を訴えた。そこには、「私も先きに献納した文明琦号に乗って、予て血盟した飛行士と一緒に敵中に躍り込み肉弾となつて彼等の心胆を寒からしむる覚悟であります」（二二三頁）と述べられている。

また、彼は何度も伊勢神宮を参詣している。一九三五年の元旦にも伊勢神宮を参拝しており、その時の様子が『所志一櫛・真の世界平和へ』の中に記されている。ここでは「天照皇大神のいますところ、神霊としへにこの国を燦<sup>みそな</sup>はせ給ひ、厳然たる神威と神徳とは洽なく四海を光照し給ふ〔…〕私は厳肅なる空気に浸りながら〔…〕愛国飛行機百台献納達成の祈願祭を莊嚴に行つた」（八頁）と記されている。それだけではなく、彼は朝鮮の各家々に神明造の神棚をまつる神棚設置運動を展開した。また、一九四〇年には皇道思想を普及するための団体として皇道宣揚会を設立して、その会長に就任した。

そして太平洋戦争が勃発すると、戦争を翼賛する活動を積極的に展開した。一九四一年と四四年に総督府中枢院の参議に任命され、朝鮮臨戦報国団の評議員など戦争翼賛団体の名誉職を多数つとめながら、一九四二年には徴兵制促進運動を展開した。また、皇道宣揚会では一九四二年に中国の華北・華中地域に進駐する日本軍を慰問したのに続き、翌年には文明埼会長を含む幹部らが朝鮮人参を携帯して約一ヶ月間中国北部前線を慰問している。

このような愛国的行為から、総督府は彼のことを「愛国翁」と称したが、朝鮮の民衆は彼のことを「文明埼」という名前をもじって「野蛮埼」と呼び、嘲笑・咀呪したとされる。先に紹介した『人類愛善新聞』に掲載された記事は、文明埼が慶尚道の道議員をつとめながら「心田開発運動」に参画し、神棚設置運動などを展開していた頃に書かれたものであるが、彼はまさに人類愛善会が推進した「皇道宣揚」と「国防運動」を朝鮮人として完全に実践するような人物であったといえよう。

また、一九三五年四月二三日付の『人類愛善新聞』には、朝鮮人代議士の朴春琴による次のような記事が掲載されている。

今日亜細亜の弱小国が英仏等から圧迫され誅求されてゐる事から考へると、日本に併合され政治、経済、文化が日々向上された朝鮮同胞は真に幸福と言はなければならぬ。而も大所から達観した場合、日本の祖先の神も朝鮮の祖先たる檀君も同じ神であると立証さるるに至つた。今日お互いが大亜細亜建設の爲めに一身同体となつて働くことは誠に意義深いことである。現在世界は非常時と叫ばれ、地上の人類は均しく不安焦燥にかられてゐる。今日に於ては朝鮮とか満洲とかいふ問題ではなく、地上の人類を如何に救ふべきかの問題に迄逢着してゐる。それには先づ欧米の行詰れる物質文明、個人主義から脱して、東洋本来の精神文化を發揮し、全亜細亜諸民族の独立を図り、之を救ふ事が世界平和の根本問題である。然るに、東洋の盟主は日本であり、東亜諸問題解決の鍵を握れる其日本が未だ其内側に基礎の確立を見ない事は甚だ以て心細い次第である。〔…〕日本が万世一系の天皇を戴いてゐる以上、此の日本が本来の力を發揮し得るようになった場合、東洋の問題も世界の問題も解決されるものと確信する。<sup>⑧</sup>

この記事には「日韓合邦は大亜細亜実現の道程なり」という副題が付されており、まさに日本を盟主としてアジアの連帯・統合を説く「大アジア主義」の思想を喧伝する内容となっている。そして、ここでもまた「檀君即素盞鳴尊」説を根拠にして、日本による朝鮮の植民地併合を正当化している点が注目される。

このような記事を寄稿した朴春琴とは、いったい如何なる人物であったのだろうか。<sup>⑨</sup> 朴春琴（一八九一―一九七三）は慶尚南道密陽郡の豪農の長男に生まれた。若い時からケンカが強く、いわゆる任侠（暴力）の世界で頭角を現したが、出世を志して一九〇七年八月頃に日本へ渡つた。そして一九一三年（二二歳の時）に頭山満のもとを訪れ、それ以来、頭山を

師と仰ぎ、指導を受けてきた。<sup>80</sup>

その後、朴春琴は一九二〇年に東京で李起東と共に、朝鮮人労働者の相互扶助団体である労働相救会を組織して会長に就任した。さらに一九二一年一二月に労働相救会を相愛会と改編して、東京本部副会長に就任した。この団体を足掛かりとして、朴春琴は政治の世界で頭角をあらわすようになった。彼の名を一躍有名にしたのは、一九三二年二月に行われた第一八回衆議院総選挙において東京第四区で当選したことである。これにより、彼は朝鮮人初の衆議院議員として日本で大きな注目を集めた。また、いわゆる皇民化政策が本格化すると、在日朝鮮人の政治的まとめ役を果たすようになり、一九三八年一月に東京在住の朝鮮人を中心とする中央協和会が結成されると、その幹部に就任し、内鮮一体運動を積極的に推進した。

そして、太平洋戦争が勃発すると、この戦争を「大東亜聖戦」と称して皇道宣揚運動を展開した。彼は朝鮮人志願兵制度を請願し、朝鮮総督府や朝鮮軍司令部の高官たちと連携して、学徒兵出征勧誘講演を行った。日本の敗戦が濃厚となった太平洋戦争末期になると、一九四五年六月に「皇道本義を期し、国民思想を統一し、非決戦的思想に対してこれを破砕し必勝態勢を完全に期する」と宣言して大義党を結成し、その党首に就任した。この団体は、皇国を守るための「忠君愛国の大義」のもとに、思想犯などの抗日反戦朝鮮人に対する暴力的な取締り活動を行った。

以上の経歴からもわかるとおり、朴春琴は始終一貫して日本の軍国主義に協力した人物であった。大本教の人類愛善運動を広報する『人類愛善新聞』には、このような第一級の朝鮮人親日派による「大アジア主義」大日本主義思想が大々的に喧伝されたのである。

#### おわりに

大正デモクラシーの挫折を経て昭和の時代になると、皇道派と呼ばれる一派が軍部で台頭したのを機に、皇道という語が高唱されるようになっていった。一言でいって、皇道とは、現人神である天皇を戴く日本が太陽として世界の中心にあり、太陽の光が四圍へ放射していくように「皇国日本」の「神聖国体」が周辺国へ波及していくというものであった。このような論理で、日本の皇道主義者は、皇道の宣布が世界の危機を救済する行為であるとみなし、「皇道の世界統一」を主張した。こうして皇道は、国際世論を無視した日本の膨張主義的な対外進出を正当化するための侵略イデオロギーの役割を果たした。しかし、日本が世界人類を救済するという肥大化した優越意識は、世界から孤立した日本の危機意識を逆説的に世界へ投影したものであったといえよう。

大本教は、出口王仁三郎というカリスマ的な指導者に率いられて、一九三〇年代以降、驚異的ともいえる発展をとげた。このような急激な発展は、満洲事変を機に日本が進もうとしていた軍事的な世界進出の方向性を、皇道という宗教的な理念のもとに先取りし、日本の将来に対して漠然とした不安感に陥っていた民衆に、「日本民族による世界統一」という壮大な「共同幻想」を与え、それを大衆運動として方向付けたところにその発展の原因があったと考えられる。

大本教は、人類愛善会という外郭団体を通じて、外国諸宗教との提携という方式をとりながら積極的な海外進出を試みた。そして大本教の海外進出は、日本軍部の膨張主義的な対外進出と軌を一にして行われ、満洲事変が勃発した一九三〇年代から本格化していった。とりわけ満洲事変を前後する時期から道院・紅卍字会との提携関係が深まり、満洲国が建国されると大本教は満洲国内で確固たる活動基盤を得た。



その後、大本教は一九三四年二月に人類愛善会朝鮮本部を設立して、朝鮮においても本格的な宣教活動を開始した。この時期に大本教が朝鮮への進出を試みたのは、「アジア連盟」の構想と関連があったと考えられる。満洲国の承認問題をめぐって国際連盟から脱退し、世界の中で孤立化した日本は、国際連盟に代わる国際機関を構築するために「アジア連盟」の創設を訴えた。それは新たに建国された満洲国と日本との連携を中核として、その連帯を中国にまで広げ、さらに他のアジア諸国・諸民族へと広げようとするものであった。その際、満洲国と日本との中間に位置した朝鮮の役割がとりわけ重要なものとなった。地政学上、植民地朝鮮は傀儡満洲国と日本(内地)とを結びつける際のいわば接合剤のような役割を果たしたからである。

そして、朝鮮における大本教の宣教活動は、日本の代表的右翼である内田良平の先導で行われた。王仁三郎は一九三四年に昭和神聖会という国家主義団体を創設し、自ら統管として皇道宣揚運動を展開した。内田は大日本生産党を率いる一方で、昭和神聖会の副統管をつとめて王仁三郎を全面的に支援した。このように一九三〇年代以降、王仁三郎と内田は相互に協力し合う関係となっていた。

また内田は、一進会という親日団体を操縦して日韓合邦運動を行った人物であり、朝鮮の宗教事情に精通していた。大本教の朝鮮進出は、内田がそれまで築いてきた人脈と活動基盤、とりわけ一進会のネットワークを引き継ぐ形で行われた。人類愛善会の朝鮮本部が結成された際、待天教(元一進会)系の信徒が多数入会していったのも、そのような理由による。

そしてまた、人類愛善会朝鮮本部には、内田が組織した同光会の人脈を通じて、檀君教の信徒が多数入会していった。これを機に大本教は檀君教への接近を試み、「檀君即素盞鳴尊」説が大本教の機関誌を通じて喧

伝されていった。このことは結果として、「日鮮同祖論」を正当化し「内鮮一体」のスローガンを後押しする効果をもたらした。

以上のことからわかるとおり、人類愛善会を通じて大本教が朝鮮で行った活動は、日本で展開していた皇道宣揚運動をそのまま延長したものであった。ただし、大本教の皇道宣揚運動は、「人類愛善」という美しいスローガンを掲げた運動として展開された。しかしながら、人類愛善運動として朝鮮で行われた活動の実態は、「国体闡明運動」や「国防運動」といったものであり、それは朝鮮総督府が「内鮮一体」として推進していた同化政策を宗教の次元で後押しするものであった。

大本教は決して暴力的な形で日本の皇道を朝鮮人に強要しようとしたわけではない。あくまでも朝鮮人と日本人との友好的な連帯を求めようとした。また、朝鮮人の側も決して大本教から強制されて人類愛善運動に参加したわけではなかった。あくまでも個人の自発的な意志によって、人類愛善運動に参画していった。しかしながら、大本教の皇道論は、天皇による普遍的同胞愛の拡張を説くものであり、独立平等の民族国家間の関係は想定されていない。

大本教信者の芦田萬象が、王仁三郎の言葉を借りて「日本には侵略と云ふ言葉はありません。唯順まごころはぬ国まこ即ち神を齋まつらざる国を順はしめる罪の師があるのみであります」(『救世と皇道大本』一九三三年、三二頁)と述べているように、そこには他民族を理解・評価する枠組みがそもそも欠けており、近隣のアジア人は、日本の主張する「皇道」を受け取るか受け取らないかという二者択一の選択しか残されていなかった。こうして、大本教の人類愛善運動には、皇道論に賛同した第一級の親日派のみが参画していくことになったのである。

王仁三郎が個人的に親交を持っていた宋秉峻や、『人類愛善新聞』の記事で取りあげられた文明琦や朴春琴は、一九四八年に李承晩政権下で設

置された「反民族行為特別調査委員会」で裁判にかけられ、民族の「売国奴」として断罪された。しかしながら、同委員会は翌年に廃止され、親日派の処罰問題は解決されなまま今日に至っている。

## 注

- ① 戦前戦後を含めて、金明霊学会・大日本修齋会・皇道大本・大本瑞祥会・愛善苑など何回も教団名称が変更されているが、現在は「宗教法人大本」が正式名称となっている。しかし、この名称は普通名詞と混同しやすい。例えば、戦前期の皇道主義者は「皇道の大本」という表現をよく使したが、この場合の「大本（おおもと）」は普通名詞であり「皇道の根源」という意味で用いられている。このような混乱を避けるために、本稿では「大本教」という通称を用いることにする。
- ② 戦前期における日本の新宗教については、「国家神道」対「民衆宗教」という対立的図式で把握される傾向がある。これに対して対馬路人は、大正期以降、近代天皇制が民衆に浸透した結果、「天津日嗣」現人神天皇の信仰が広く社会に定着し、この天皇制イデオロギーの枠を借りる形で、超人間的指導者や統治者の観念、及び救世主の観念をもつ民衆宗教の教義が類似的に創出されていったと指摘している（対馬路人「終末預言宗教の系譜―日本の新宗教を中心として」中央学術研究所編『真理と創造』第二四号、一九八五年一月、一〇三頁）。大本教の本質を理解する上で重要な指摘であると思われる。
- ③ 拙稿「大本教と道院・紅卍字会との提携―宗教連合運動に内包された政治的含意」、『立命館文学』第六六七号、二〇二〇年三月）を参照。
- ④ 大本七十年史編纂会編『大本七十年史』上巻、宗教法人大本、一九六四年、七七〇～一頁。
- ⑤ 拙稿「満洲事変における大本教の宣教活動―道院・紅卍字会との提携を中心に」、『立命館文学』第六七三号、二〇二一年三月）を参照。
- ⑥ 大本の皇道思想に着目した研究として、水内勇太「皇道大本の思想と行動―皇道大本前史」、『人文学報』第一〇八号、二〇一五年二月）がある。

- ⑦ 王仁三郎の活動について、本稿では主に以下を参照した。村上重良『出口王仁三郎』（新人物往来社、一九七三年）、同『評伝・出口王仁三郎』（三省堂、一九七八年）、出口京太郎『巨人出口王仁三郎』（天声社文庫版、二〇〇一年）、松本健一『出口王仁三郎：屹立するカリスマ』（リブローポト、一九八六年）、川村邦光『出口なお・出口王仁三郎』（ミネルヴァ書房、二〇一七年）。
- ⑧ 昭和前期の皇道宣揚運動については、阪本是丸『昭和前期の「神道と社会」に関する素描―神道的イデオロギー用語を軸にして』（国学院大学研究開発推進センター（阪本是丸責任編集）『昭和前期の神道と社会』弘文堂、二〇一六年、一～四六頁）を参照。
- ⑨ 高野裕基『河野省三の学問と思想』藤田大誠『国家神道と国体論―宗教とナショナリズムの学際的研究』弘文堂、二〇一九年、四〇七～八頁。
- ⑩ 河野省三『皇道の研究』博報堂出版部、一九四二年、一三頁。
- ⑪ 以下、「神皇の道」という用語の歴史的使用例に関しては、河野省三、前掲『皇道の研究』（五二頁～五七頁）を参照した。
- ⑫ 秦郁彦『軍ファシズム運動史』河出書房新社、一九七二年、七二・七四～五頁。
- ⑬ 守田貞記『皇道維新と荒木イズム』皇道館川崎政治学院、一九三三年、二八・六七頁。
- ⑭ 以下は、武田幸也『近代の神宮と教化活動』（弘文館、二〇一八年）の第六章「今泉定助の皇道発揚運動」を参照。
- ⑮ 武田幸也、前掲『近代の神宮と教化活動』二九二～四頁。
- ⑯ 白鳥庫吉『国体と皇道』（杉浦重剛・白鳥庫吉著、松宮春一郎編著『国体真義』世界文庫刊行会、一九二八年、四～二六頁）を抄訳。
- ⑰ 加藤玄智『神道の再認識』章華社、一九三五年、一四八頁。
- ⑱ 同右。
- ⑲ 以下、河野省三、前掲『皇道の研究』（一九四二年）からの引用は、本文中に頁数のみを記す。
- ⑳ 浅野和三郎講述、瀧川辰郎筆記『皇道大本の概要』大日本修齋会、一九二〇年。
- ㉑ 浅野和三郎『大正維新の真相』大日本修齋会、一九一九年、二七六頁。

- ②② 『皇道大本事務便覧(分所支部備付)』皇道大本本部編、天声社、一九三三年、一頁。
- ②③ 「皇道大本信条」は大正六年一月に制定された後、大正七年一月(二回目)、大正八年一〇月(三回目)、昭和八年三月(四回目)と三回改定された。それらを比較すると、昭和三年の改定において皇道の理念がより強調されていることがわかる。
- ②④ 栗原彬「一九三〇年代の社会意識と大本―社会不安と両義性の宗教」『思想』第六二四号、岩波書店、一九七六年六月、四〇頁。
- ②⑤ 昭和青年会本部編輯兼発行『昭和青年会、昭和坤生会一覽』(一九三四年、三四頁)の「昭和青年会編隊一覽」によると、各隊の人数とリボンの色は、小隊(三〇名内外、黄色)、中隊(六〇名内外、緑)、大隊(申請制、白)、主隊(申請制、赤)となっている。
- ②⑥ 昭和青年会本部編『神示の国防』(天声社、一九三三年)冒頭の「巻頭言」。本書は王仁三郎に下された神示のうち、国防に関するものを抜粋したもので、神国日本の国防、皇道世界の建設、国際連盟との対決、満洲国承認問題などについて記されている。
- ②⑦ 「京都岡崎公会堂に於て満洲上海兩事変戦没者慰霊祭、昭和青年本部主催」『真如の光』昭和八年一〇月三日号、八〇九頁。
- ②⑧ 当初は『昭和青年』と称していたが、昭和八年一月号から『昭和』に改称された。
- ②⑨ 陸軍大臣荒木貞夫「皇道宣明は世界平和の元」『昭和』昭和八年一〇月号、三〇四頁。
- ③⑩ 陸軍大将荒木貞夫「昭和維新の建設へ」『昭和』昭和九年五月号、五〇七頁。
- ③⑪ 芦田萬象『救世と皇道大本』天声社、一九三三年、一〇〇頁。
- ③⑫ 第二次大本事件の裁判記録によると、数百部または数千部を分所や支部へ割り付け配布し、「本部に対しては全部売却したる如く報告して割当てられた数に対する代金全部を送付し」た場合が含まれており、漸次配布数が減少して、実際は約三〇万部の発行であったとされている(社会問題資料研究会編『皇道大本教事件に関する研究(思想研究資料特輯第六六号)』社会問題資料叢書第一輯、東洋文化社、一九七七年、二五三頁)。

大本教の皇道宣揚運動と人類愛善会朝鮮本部の設立

- ③⑬ 「人類愛善新聞」昭和八年四月三日号、第一面「伊勢神宮に総裁皇威宣揚の祈願、香良洲神社にも同様参拝、国体闡明運動に魁けて」。
- ③⑭ 「人類愛善新聞」昭和八年二月三日号、第一面「官庁・軍隊・学校等に祖国天祖を奉祀せよ、非常時日本の根本的対策」。
- ③⑮ 〈本部通達〉「兵器資金献金の件」『真如の光』第二八七号、昭和八年九月三日、四頁。
- ③⑯ 出口王仁三郎『皇道我観』(王仁文庫第一編)、第二天声社、一九二〇(大正九)年六月初版、一九三一(昭和六)年六月再版。これは王仁三郎が『神霊界』大正八年四月一日号から同年六月一五号にかけて連載したものを訂正して収録したものである。
- ③⑰ 編輯者浅野和三郎『国教論集』(王仁文庫第二編)、大日本修斎会、一九二〇年。本書には『国教樹立論』『信仰の墮落』『皇国伝来の神法』『太古の神の因縁』の四篇が収められている。第一章「国教樹立論」は『神霊界』の大正七年三月号から同年五月一日号まで連載されたものであり、第二章「信仰の墮落」は同じく大正六年二月号、第三章「皇国伝来の神法」は大正七年五月一日号、第四章「太古の神の因縁」は大正七年二月号に掲載されたものを若干改訂したものである。
- ③⑱ 出口瑞月『皇道大意』天声社、一九三二年。
- ③⑲ 出口王仁三郎『皇道維新と経綸』天声社、一九三四年。
- ④⑰ 『出口王仁三郎全集』巻一「皇道篇」、万有社、一九三四年六月、あいぜん出版復刻版、一九九八年。第一篇「皇道大意」、第二篇「皇道我観」、第三篇「国教論」、第四篇「日本精神の真髓」、第五篇「皇道と国体」、第六篇「愛善の真意議」、第七篇「高天原」、第八篇「瑞祥」となっている。以下、本書からの引用は、本文中に括弧で頁数のみを記す。
- ④⑱ 有留弘泰『皇道宣揚』昭和青年会編輯兼発行、一九三四年、一一二頁。
- ④⑲ 有留弘泰編『皇道の葉』天声社、一九三三年。以下、本書からの引用は、本文中に括弧で頁数のみを記す。
- ④⑳ 内田と王仁三郎との交流に関しては、以下を参照した。黒沢文貴「〈解題〉内田良平と内田良平文書」(内田良平文書研究会編『内田良平関係文書』巻一、芙蓉書房出版、一九九四年)、初瀬龍平「伝統的右翼・内田良平の研究」(九州大学出版会、一九八〇年)、滝沢誠「評伝内田良平」(大

- 和書房、一九七六年）、江島靖嘉「内田良平と出口王仁三郎」（『不二』二〇〇二年三月号）。
- ④④ 同光会に関しては、初瀬龍平、前掲『伝統的右翼・内田良平の研究』（二三二～五頁）、および、拙稿「植民地朝鮮における檀君教の沿革と活動」（『朝鮮史研究会論文集』第四一集、二〇〇三年一〇月、二二二～三頁）を参照。
- ④⑤ 「朝鮮内政独立請願書」の筆頭に「檀君教大宗師・鄭薫模」、その次に「同教総教長・尹吉炳、同教教約長・鄭基弘」、それに続けて檀君教の信徒一〇名の名前が署名され、その後他の宗教教団に属する者たちの名前が署名されている。鄭薫模等「朝鮮内政独立請願ニ関シ要路並ニ貴衆両院議員諸公ニ訴フ」大正十一年三月（『不逞団関係雑件・朝鮮人ノ部、在内地（二三）』日本外務省外交史料館所蔵）。拙稿、前掲「植民地朝鮮における檀君教の沿革と活動」二二二頁。
- ④⑥ 『東京朝日新聞』大正十一年三月一五日付、朝刊、第三面「同光会の朝鮮有志招待」。
- ④⑦ 拙稿「一九二〇年代「満州」における「大高麗国」建国構想―朝鮮新宗教と日本興亜主義者との邂逅」（『国学院大学日本文化研究所紀要』第九四集、二〇〇四年九月）を参照。
- ④⑧ 黒龍会編『東亜先覚志士記伝』下巻（黒龍会出版部、一九三六年、二五～七頁）の三「末永節と肇国会」を参照。
- ④⑨ この計画の背景には、一進会財団の満洲集団移住計画があった。内田と一進会指導者の宋秉峻と李容九の間には「一進会財団」計画が画策されていた。この計画は、日韓合邦を達成した暁に、一進会の会員百万人を率いて満洲に集団移住させ、自治制を行いながら満蒙の独立を図るとするものであった（滝沢誠「権藤成卿」紀伊国屋書店、一九七一年、四〇頁）。末永の「大高麗国」構想は、この一進会財団の計画を継承させたものであった。長谷川雄一「大正中期大陸国家へのイメージ―「大高麗国」構想とその周辺」（『国際政治』第七一号、日本国際政治学会、一九五七年）を参照。
- ⑤⑩ 「同光会役員氏名」『亜細亜時報』第五卷第二号、黒龍会出版部、大正一〇年二月、二ノ特一二頁。
- ⑤① 内田良平『時代思想の顕現せる天理教と大本教』黒龍会、一九三六年。
- ⑤② 同右、七〇～二頁。
- ⑤③ 内田が大本教を訪問し、王仁三郎と最初に面会した模様については、『神の国』第六五号（一九二五年一月、一〇九頁以下）に記録されている。
- ⑤④ 『人類愛善新聞』一九三〇年七月二三日号、第二面「出口総裁はわが日本之宝である」。
- ⑤⑤ この時の模様は、『日月日記』巻二一、十一月二七日条（月の家著、第一天声社、一九三〇年六月発行、三〇二～一〇頁）、『日月日記』巻二二、十一月一八日条（一九三〇年七月発行、一～八五頁）に詳しく記録されている。
- ⑤⑥ 前掲『日月日記』巻二二、十一月一八日条、一九三〇年七月発行、八頁。
- ⑤⑦ 前掲『大本七十年史』下巻、三五頁。
- ⑤⑧ 王仁三郎の直孫である出口京太郎によると、内田は大本祝詞のりの立派さにうたれ、大本教のご神体を奉斎していたという（出口京太郎、前掲『巨人出口王仁三郎』二三九頁）。
- ⑤⑨ 黒沢文貴、前掲「解題」内田良平と内田良平文書』『内田良平関係文書』巻一、一五～六頁。
- ⑥⑩ 内田良平、前掲『時代精神の顕現せる天理教と大本教』七三頁。
- ⑥① 『大日本生産党主義政綱党則』の「主義」四頁（前掲『内田良平関係文書』巻一〇、五二頁）。
- ⑥② 王仁三郎が内田・頭山らと行った山陰旅行の際に、幹部の藤原勇造らを奔走させ、信者の献金を集めて持ち帰らせたという記録がある（前掲『大本七十年史』下巻、三三三頁）。
- ⑥③ 昭和六年九月一日北国新聞夕刊所載記事「出口氏の名によって北九州を震撼させた内田良平氏の講演行脚」（『更生日記』巻九、月の家著、第一天声社、一九三二年二月、八四頁）。
- ⑥④ 『人類愛善新聞』一九三一年一月一三日号、第二面「世界平和確立の大先覚大聖雄現はる、人類愛善会出口総裁こそ世界人類を救ふ神雄だ、内田氏 惟神の大道を説く」。
- ⑥⑤ 『人類愛善新聞』一九三一年一月二三日号、第二面、内田良平氏「譏誣の内に完成せる出口聖師の大偉業」。

- ⑥⑥ 内田良平「滿蒙の問題は国民が起つて処決せよ」『神の国』第一五一号、一九三一年八月一〇日、六四頁。
- ⑥⑦ 吉田勲明編『巨人頭山満翁は語る』感山荘、一九三九年、一一七頁。
- ⑥⑧ 同右、三四一頁。
- ⑥⑨ アジア主義は、①純粹の「アジア連帯主義」と、②アジア侵略のイデオロギーとしての「大アジア主義」の二つに分類される。明治維新から日清・日露戦争に勝利する過程で前者は後者へ転落する傾向を有した（初瀬龍平、前掲『伝統的右翼、内田良平の研究』二三三頁）。
- ⑦① 内田良平『皇道に就いて』黒龍会出版部、一九三三年（前掲『内田良平関係文書』巻一〇、二三五頁）。
- ⑦② 出口王仁三郎「国教樹立論」『昭和』昭和九年一〇月号、五・八頁。
- ⑦③ 内田良平『対外国是樹立の急務』鈴木一郎発行、一九三四年八月。本書は「黒龍会主幹、大日本生産党総裁」の名義で書かれており、付録として「大日本生産党の主義政綱解説」「国是及び国策私案」「皇道と世界統一論」が付されている。それらのうち、皇道論に関するものは、王仁三郎の「国教樹立論」の内容とほぼ同じである。以下、本書からの引用は本文中に頁数のみを記す。
- ⑦④ 『人類愛善新聞』昭和八年二月三日号、第一面、出口王仁三郎「わが皇道の光が八紘に輝く秋到来、釈迦・孔子・キリスト等の教義も聖人や賢哲の唱へた社会経綸説も今後は何等の權威なし」。
- ⑦⑤ 芦田萬象『救世と皇道大本』天声社、一九三三年。以下、本書からの引用は本文に頁数のみ記す。
- ⑦⑥ 『人類愛善新聞』昭和九年二月一三日号、第二面「〈天の声〉小日本主義は皇道の仁愛を毒す」。
- ⑦⑦ 『人類愛善新聞』昭和六年一月三日号、第一面「天の大使命を覚つて滿蒙の時局に臨む、小日本主義と大日本主義此兩者を過る者は天の賊」。
- ⑦⑧ 村上重良、前掲『出口王仁三郎』一九七頁。ただし、第二次大本事件における王仁三郎の供述によると、実際の会員数は約一四〇五万人、賛同者は約一五〇万人程度であったという（社会問題資料研究会編、前掲『皇道大本教事件に関する研究』二五六頁）。
- ⑦⑨ 昭和神聖会統管出口王仁三郎述「肇国皇道の大精神」『神聖』昭和九年一月号（池田昭編『大本史料集成Ⅱ…運動篇』三一書房、一九八二年、七二〇～一頁）。
- ⑧① 「昭和神聖運動通達」一、反国体学説絶滅運動に関する件、『真如の光』一九三五年四月二五号、一七頁。
- ⑧② 有留弘泰『神聖運動』昭和青年会、一九三五年。
- ⑧③ 「我国は帝国に非ず大日本皇国なり」『昭和』昭和一〇年三月号、五八～六〇頁。
- ⑧④ 出口王仁三郎「肇国皇道の大精神」『神聖』昭和九年一月号（前掲『大本史料集成Ⅱ…運動篇』七二二頁）。
- ⑧⑤ 昭和神聖会統管出口王仁三郎「神聖運動」とは何か『神聖』昭和一〇年七月号（池田昭編、前掲『大本史料集成Ⅱ…運動篇』八〇四～一二頁）。
- ⑧⑥ 『人類愛善新聞』一九三四年七月三日号、第二面「大難局打開の鍵は皇道経済あるのみ」。『人類愛善新聞』一九三五年一月三日号、第一面、内田良平「皇国経済考（一）」。
- ⑧⑦ 『人類愛善新聞』一九三四年七月二三日号、第二面「自由主義政策を克服して皇道政治の確立へ」。
- ⑧⑧ 昭和神聖会統管出口王仁三郎述「肇国皇道の大精神」『神聖』第一卷第二号、一九三四年一月号、一三～二五頁。
- ⑧⑨ 『人類愛善新聞』一九三五年七月二三日号、第一面、昭和神聖会統管出口王仁三郎「〈昭和神聖会結成一周年に際して〉天に一日地に一君、御稜威弥栄ゆ皇国日本―昭和神聖会とは如何なるものか、神政復古すべき昭和維新来る」。
- ⑧⑩ 出口王仁三郎述『皇道経済我観』昭和神聖会、一九三四年、一二頁。
- ⑧⑪ 出口王仁三郎『惟神の道』天声社、一九三五年、二七二頁。
- ⑧⑫ 王仁三郎は、陸軍省の桜会の大立物でクーデター派といふべき参謀本部の橋本欣五郎中佐と親交を結んでいた。王仁三郎は一九三一年の十月事件の前に、その中心人物の橋本に「有事の際は東京に次で全国の信者を動員すべく」と申し入れたとされる（中濃教篤『天皇制国家と植民地伝道』国書刊行会、一九七六年、三二二頁）。
- ⑧⑬ 池田昭は、大本教弾圧事件に直接関わった内務省警保局の宗教係担当官の証言などから、大本教の弾圧理由が、皇道派と結びつく可能性のあった

国家主義的変革諸団体の取り締まりにあったとしている。池田昭「解題」『大本史料集成Ⅲ・事件篇』三二書房、一九八五年、八一三頁。

- ⑨② 村上重良『天皇制国家と宗教』日本評論社、一九八六年、二二九頁。
- ⑨③ 王仁三郎は、一九二〇（大正九）年に革新的国家主義団体である猶存社の中心メンバーであった北一輝・大川周明・満川亀太郎と面会している。この時、王仁三郎は「立替え立直し」を唱え、猶存社でも「国家改造」を訴えていた。『北一輝―日本ファシストの象徴』（田中惣五郎、未来社、一九五九年、一九二頁）によると、出口王仁三郎が「東京に片目の偉人がいる」というお筆先が出たので、大川周明「梅毒性の白濁で片目が見えない」にあつてみたが満足せず、次いで北一輝「負傷して右目が義眼」と会見したとある。この時、北一輝は法華経を信仰しており、大本教は神ではなくて相当通力を以て居る邪霊であると述べたとされる。なお松本健一は、北一輝と王仁三郎の二人はお互いを相当意識していたとして、次のように述べている。「北一輝と出口王仁三郎とは、似たもの同士だった。この似た者同士の二人のカリスマは、天皇制国家のもとで結果としてその体制を見做い、いわば「天皇」を「革命」と同義語とする変革の原理に仕立て、「天皇」革命の国家を造形しようとした。それは、天皇を国家の支配原理とする天皇制国家のなかで、〈もう一つの天皇制〉を形づくることを意味した」（松本健一、前掲『出口王仁三郎』二〇六―七頁）。
- ⑨④ 前掲『大本七十年史』下巻、三三三―三四頁。
- ⑨⑤ 黒龍会倶楽部編『国土内田良平』原書房、一九六七年、七一三頁。
- ⑨⑥ 前掲『大本七十年史』上巻、七六八―九頁。
- ⑨⑦ 内田良平『満蒙の独立と世界紅十字会の活動』先進社、一九三一年、一―六頁。
- ⑨⑧ 前掲『大本七十年史』上巻、七二〇―一頁。
- ⑨⑨ 『昭和青年』昭和七年一月号（前掲『大本史料集成Ⅱ・運動篇』四七一―頁）。
- ⑩⑩ 『人類愛善新聞』昭和六年九月三日号、第二面「支那に於ける布教禁止と本会」。
- ⑩⑪ 『人類愛善新聞』昭和六年十一月二三日号、第二面、内田良平氏「讒誣の内に完成せる出口聖師の大偉業」。
- ⑩⑫ 「事情通内田良平翁語る」『大阪経済新聞』昭和六年九月二九日所載、「更生日記」巻九、昭和七年二月発行、二二六頁。
- ⑩⑬ 「内田良平翁「支那」を語る（二）」『大阪経済新聞』昭和六年一〇月一日所載、「更生日記」巻一〇、昭和七年三月発行、四六頁。
- ⑩⑭ 内田良平「満蒙対策緊急見書」昭和六年十一月五日（前掲『内田良平関係文書』巻一〇、五八―九頁）。
- ⑩⑮ 内田良平、前掲『満蒙の独立と世界紅十字会の活動』一九三二年二月。本書からの引用は、本文中に頁数のみを記す。
- ⑩⑯ 『人類愛善新聞』昭和六年二月三日号、第二面「武運長久を祈つて本庄、多門両司令官に大本から感謝状を贈る」。
- ⑩⑰ 前島不二雄「軍ファシズム運動と大本教」『日本史研究』第七五号、日本史研究会、一九六四年十一月、六七頁。
- ⑩⑱ 内田良平「皇国日本の大使命」『人類愛善新聞』昭一〇年四月下旬号（初瀬龍平、前掲『伝統的右翼…内田良平の研究』三七三―四頁）。
- ⑩⑲ 筆者が調査したところ、例えば『東亜日報』だけでも、一九二〇年代から三〇年代にかけて大本教関連の記事が四〇件以上掲載されている。
- ⑩⑳ 『朝鮮日報』一九二二年五月二二日付、第三面「大本教信者外朝鮮에 四千名」。
- ㉑ 『朝鮮日報』一九三三年二月八日付、第一面、社説「大本万字兩教의 合同說을 聞하교」。
- ㉒ 『出口王仁三郎全集』巻六「入蒙記其の他」、天声社、一九三五年初版、あいぜん出版、一九九八年復刻版、二四頁。同じことが、上野公園著『王仁蒙古入記』蠶都新聞社、一九二五年（あいぜん出版、一九九四年復刻版、一一頁）にも記されている。
- ㉓ 『神の国』第六七号、大正一四年二月一〇日、一一七頁。
- ㉔ 藤原勇造・伊藤永春「日出磨様満州御巡笈記（完）」『真如の光』昭和九年九月一〇日号、三六頁。
- ㉕ 前掲『大本七十年史』上巻、七六二―四頁。
- ㉖ 北村隆光「亜細亞民族大会準備会に列して」『昭和』昭和九年四月号、一一〇頁。
- ㉗ 『人類愛善新聞』昭和六年二月三日号、第一面「平和の使者たる天孫

民族勝利の日」。

- ①⑧ 『人類愛善新聞』昭和七年一〇月二三日号、第二面「(亜細亜の現状)白人の支配から脱し亜細亜は民族の手で、国際聯盟は満州問題によって完全に認識不足を暴露」。
- ①⑨ 『人類愛善新聞』昭和七年二月二三日号、第三面、東洋研究会主幹中平亮「資源を東洋人の手に収め大亜細亜聯盟結成へ、精神的経済的に握手せよ」。
- ①⑩ 陸軍中将佐藤清勝「孤立日本の実状、日本対世界戦争の徴」『昭和』昭和八年一月号、一七〜二〇頁。
- ①⑪ 陸軍中将四天王延孝「皇道こそ唯一のもの」『昭和』昭和八年一月号、三〇〜一頁。
- ①⑫ 東洋研究会主幹中平亮「亜細亜民族起つ」『昭和』昭和八年一月号、三四頁。
- ①⑬ 日本新聞主幹若宮卯之助「東亜細亜聯盟の結成」『昭和』昭和八年一月号、五〜六頁。
- ①⑭ 総裁出口王仁三郎「亜細亜問題の解決を語る」『昭和』昭和一〇年八月号(前掲『大本史料集成Ⅱ・運動篇』六九三〜四頁)。
- ①⑮ 吉野花明「大亜細亜主義」『昭和』昭和八年二月号、三一頁。
- ①⑯ 長瀬鳳輔「日韓併合は亜細亜聯盟の前提」『亜細亜時論』第五卷第三号、黒龍会出版部、大正一〇年四月一日、三ノ九頁。
- ①⑰ 同右、三ノ六頁。
- ①⑱ 内田良平「亜細亜聯盟の提唱」『昭和』昭和八年一月号、三五〜六頁。
- ①⑲ 内田良平「日韓併合当時の思出」『昭和』昭和九年八月号、三八〜四五頁。
- ①⑳ 鈴木一郎編輯兼発行『日韓合邦記念塔写真真帖』黒龍会本部、一九三四年一月、七頁。戦後にこの記念塔は撤去されたが、内田の門下であった影山正治が青梅市の勤皇村大東農場に建てた大東神社に、頭山の題字を刻した石柱が移設されている。
- ㉑ 『塔内石室二納メタル功労者芳名』前掲『日韓合邦記念塔写真真帖』一一〜一六頁。
- ㉒ 李顕奎「一七、祝辞」、李海天「一八、祝辞」前掲『日韓合邦記念塔写真真帖』三三頁。

大本教の皇道宣揚運動と人類愛善会朝鮮本部の設立

真帖』三三頁。

- ①⑳ 出口王仁三郎「二〇、祝辞」前掲『日韓合邦記念塔写真真帖』三三頁。なお、この祝辞は『人類愛善新聞』昭和九年一月二三日号、第二面「日韓合邦記念塔」にも掲載されている。
- ㉑ 『人類愛善新聞』昭和九年一〇月三日号、第四面「記念塔の地鎮祭、昭和神聖会の神祇部で厳修」。
- ㉒ 『人類愛善新聞』昭和九年二月二三日号、第二面「日韓合邦記念塔、盛大なる竣成奉告式」。
- ㉓ 『人類愛善新聞』昭和九年二月二三日号、第二面「日韓合邦記念塔」。
- ㉔ 内田良平による「日韓合邦記念塔の歌」前掲『日韓合邦記念塔写真真帖』三六頁。
- ㉕ 内田良平「日韓合邦記念塔建設に就て」前掲『日韓合邦記念塔写真真帖』七頁。
- ㉖ 同右、五頁。
- ㉗ 前掲『大本七十年史』下巻、二七八頁。「人類愛善会朝鮮本部開会余録」『真如の光』昭和一〇年一月三・一〇日合併号、一一頁。
- ㉘ 『人類愛善新聞』昭和九年二月一三日号、第二面「京城に人類愛善会」。
- ㉙ 中濃教篤、前掲『天皇制国家と植民地伝道』二七三〜五頁。
- ㉚ その模様に関しては、『人類愛善新聞』昭和九年二月一三日号、同一二月二三日号、同昭和一〇年一月三日号に関連記事が掲載されている。
- ㉛ 『人類愛善新聞』昭和九年二月一三日号、第二面「京城に人類愛善会、朝鮮本部設置、志士李海天氏等の努力で発会」。
- ㉜ 関東軍参謀部第二課は一九三八〜九年頃にソ連領内に在住する朝鮮人の少数民族闘争を利用して「李海天工作」と称する工作活動に着手したが、結局失敗に終わった。『満洲に関する用兵的観察』巻一〇、第四篇第六章第四節「謀略」、昭和二七年九月、防衛省防衛研究所、アジア歴史資料センター(RefC13010012300)。
- ㉝ 李容九の長男が李顕奎(養子)であり、次男が李碩奎(実子)であった。次男の李碩奎は日本の立教大学を中退した後、二松専門学校を卒業した。一九三七年に朝鮮に戻り、翌年に侍天教を大東一進会として再発足させた。大東一進会は、忠良なる皇国臣民として内鮮一体を目指すことを綱

領に掲げ、一九三九年には黒龍会と合同して日韓併合功労者感謝慰霊祭を挙行した。解放後に彼は日本へ渡り、大東国男という仮名で活動し、『李容九の生涯』（時事通信社、一九六〇年）という本を刊行している。大東国男が、兄の李顕奎から聞いた話によると、晩年の内田は年に数回朝鮮から上京する李顕奎に会うたびに「お父さんの李容九や我々の合邦の素志があんな形になったことに責任を感じている。私は日韓合邦のやり直しを大本でやるつもりである」ともらしていたという。滝沢誠、前掲『評伝内田良平』三二九〜三〇頁。

⑭ 『人類愛善新聞』昭和九年二月一三日号、第二面「京城に人類愛善会、朝鮮本部設置、志士李海天氏等の努力で発会」。

⑮ 「記念塔建設経過報告」前掲『日韓合邦記念塔写真真帖』三六頁。

⑯ 『人類愛善新聞』昭和九年二月一三日号、第二面「京城に人類愛善会」。

⑰ 同右。

⑱ 『釜山日報』一九三四年二月二日、夕刊、第二面「半島の宗教界に投げかける波紋、開拓に乗出す大本教、待天教を足場に内部工作開始」。

⑲ 『京城市外下注十里四〇六住李喜侃氏より内田良平氏に送りたる書信』

『日月日記』卷一一、昭和五年六月発行、一三〇頁。

⑳ 『人類愛善新聞』昭和九年二月一三日号、第二面「京城に人類愛善会」。

㉑ 『人類愛善新聞』昭和一〇年一月三日号、第三面「輝く半島文化史、画期的雄図愈々完成す」。

㉒ 鄭鎮洪編『檀君教復興経略』（啓新堂、一九三七年、四四頁）の名簿参照。

㉓ 檀君教の資料をみると、元一進会の幹部であった尹吉炳が檀君教総教部長をつとめたほか（前掲『檀君教復興経略』「檀聖殿建築」一五〇頁）、同じく元一進会幹部の尹甲炳も一九三二年に組織された檀君神殿奉賛会の会員になっている（前掲『檀君教復興経略』「神殿奉賛会発起」一六三頁）。その他、筆者が確認できたものだけでも、李鍾哲・林丙翊といった元一進会員が檀君教の大宣師となっている（前掲『檀君教復興経略』四四頁）。

㉔ 伊藤永春「日出磨様朝鮮御巡笈記」『真如の光』昭和一〇年一月三・一〇日合併号、一〇頁。

㉕ 如是我聞、玉鏡「亜細亜大陸と素尊の御職掌」『神の国』第一六九号、

昭和八年二月、四〇〜一頁。宇佐美審一郎「王仁三郎の入蒙と亜細亜主義」『昭和』昭和九年二月号、一七〜二〇頁。その他、芹田萬象、前掲「救世と皇道大本」（三〇〜三二頁）にもそのまま引用されており、当時の大本教信者の間で広く信じられていた歴史説であった。

⑳ 『檀君即素盞鳴尊』説については、今西龍「檀君考」（『朝鮮古史の研究』近澤書店、一九三七年初版、国書刊行会、一九七〇年復刻版）を参照。

㉑ 朝鮮神宮の祭神論争に関しては、管浩二「日本統治下の海外神社―朝鮮神宮・台湾神社と祭神」（弘文堂、二〇〇四年）の第三章「朝鮮神宮祭神論争」の構造」を参照。

㉒ 小笠原省三「朝鮮神宮を中心とした内鮮融和の一考察」顕彰日本社、一九二五年、四〜九頁。

㉓ 「素尊御事蹟曾尸茂梨」『神の国』第八三号、大正一四年二月八日、七八〜九二頁。

㉔ 『人類愛善新聞』昭和六年二月二三日号、第二面「日支の係争は切開の外に道がない、神典に照せば理義明白」。「大白山」と記されているが、「大白山」の誤りであると思われる。

㉕ 「愛善会たより」（支部新設）「春川支部、朝鮮江原道春川郡」昭和五年二月二五日、「真如の光」昭和六年一月一五日号、六〇頁。

㉖ 「行脚の栞」（朝鮮より）『真如の光』昭和七年四月二五日号、一二二頁。

㉗ 『人類愛善新聞』昭和九年二月一三日号、第三面「朝鮮牛頭山の聖域に素尊の神霊を奉祀」。同年四月三日号、第三面「朝鮮牛頭山上の聖域に素尊の神霊を奉祀、江原道会議員等が建議す」。

㉘ 『人類愛善新聞』昭和九年二月一三日号、第三面「朝鮮牛頭山の聖域に素尊の神霊を奉祀」。

㉙ 藤原勇造・伊藤永春「日出磨様満州御巡笈記（完）」『真如の光』昭和九年九月一〇日号、三五頁。一九三五年に第二次大本事件が起こったために、実現には至らなかった。

㉚ 例えば、日出磨「光明国道中記」（『神の国』第一七一号、昭和八年四月、三五頁）の三月二四日条に「井上宣文氏谷村氏と来り檀君教に関し抱負を語る」と記されている。

㉛ 『人類愛善新聞』昭和一〇年二月一三日号、第三面「檀君参拝」。



- ①⑦ 山口白峯報「朝鮮檀君教本部参拝記」『真如の光』昭和一〇年二月二五日号、三四頁。
- ①⑧ 「神機の動き」〈朝鮮主会〉『真如の光』昭和九年二月三日号、九頁。
- ①⑨ 出口宇知磨「節分祭に於ける諸事の挨拶・希望・報告」『真如の光』昭和九年二月一七・二五日合併号、一〇頁。
- ①⑩ 「神機の動き」〈朝鮮主会〉『真如の光』昭和九年四月二五・五月三日合併号、三三頁。
- ①⑪ 同右。
- ①⑫ 航空部主任神本泰昭「防空展覧会実施に就て」『真如の光』昭和八年二月一〇日号、三〇頁。
- ①⑬ 昭和青年会統務補神本泰昭「防空展と訓練に就て」一、拳国制空一厘の献金、『真如の光』昭和九年二月一七・二五日合併号、一八頁。
- ①⑭ 〈神機の動き〉「朝鮮主会」『真如の光』昭和九年八月二五日号、一二頁。
- ①⑮ 「人類愛善新聞」昭和九年一月三日号、第一面「在京の朝鮮志士蹶起、全線の皇道化運動、檄文を発表して呼びかく」。
- ①⑯ 「人類愛善新聞」昭和一〇年二月一三日号、第三面、京城人類愛善会鄭啓源「基督教に歪められた反国体思想を断滅せよ、神社参拝拒否は最も遺憾」。
- ①⑰ 彙報「心田開発委員会」『朝鮮』第二四九号、一九三六年二月、一〇五〜六頁。
- ①⑱ 「人類愛善新聞」昭和九年九月二三日号、第三面「全鮮に敬神思想拡大、慶尚北道の文明琦氏」。
- ①⑲ 以下は、『親日人名辞典』卷一（民族問題研究所、二〇〇九年）の「文

明琦」の項目（七八六〜九〇頁）を参照。

①⑳ 『東亜日報』一九三四年二月六日付、夕刊、第二面「国防義金。豆十萬円献納、盈徳邑内文明琦氏」。『東亜日報』一九三五年三月二二日付、夕刊、第二面「文明琦号、命名式挙行、汝矣島飛行場에서 飛行機献納式」。『毎日申報』一九三五年四月七日付、夕刊、第二面「文明琦氏献納、海軍機命名式」。

①㉑ 『毎日申報』一九四三年一月二四日付、夕刊、第二面「半島서도 献鑑運動、愛国翁文明氏提唱、銅鉞三箇所率先提供」。

①㉒ 文明琦『所志一檄、眞の世界平和へ』雲岩書齋、一九三七年。同書からの引用は、本文中に頁数のみを記す。

①㉓ 「人類愛善新聞」昭和一〇年四月二三日号、第二面、朴春琴「東亜大同団結の第一歩として、本来の日本に目醒めよ」。引用者によって句読点を補足して付した。

①㉔ 朴春琴の経歴については、前掲『親日人名辞典』卷二の「朴春琴」の項目（二三九〜一四三頁）を参照した。なお、『植民地帝国人物叢書三三（朝鮮編一四）』（永島広紀編集、ゆまに書房、二〇一〇年）に、西田鶴子著『朴春琴代議士小伝：日鮮融和の魁・日本主義の雄』（大日統社、一九三三年）と、朴春琴『我等の国家新日本、朝鮮同胞の不安を窘窮を述べて朝野諸賢に懇ふ』（朴春琴事務所、一九三〇年）が掲載されている。

①㉕ 朴春琴「国宝頭山翁」藤本尚則『頭山精神』文雅堂、一九四二年、一六四頁。

（本学文学部教授）

